

夕かせに露はこぼるゝ蓮葉のうらなる玉はぼたるなりけり  
夕露にものかひかりのうつるをは友かと見てやぼたるとふらむ

朝顔

葉かくれてさけるまかきの朝顔はあした面なきけしきなるかな

河夏月

山川の底のさゝれもよひはかり見えて涼しき夏の夜の月  
行路夕立

そほち来て野中の松の下蔭にやとれははるゝ夕立の雨

夏懐舊 佐々木弘綱か一年祭に

このころの心にまける夏草は君をまのふのほかなかりけり

五月雨

此朝け軒端のくりの花ちりてさみたれはるゝ風わたるなり  
梅雨のいまはとはるゝあさかせに軒のまのふの露そこぼるゝ

寄書懐舊 伴信友翁か贈位ありしにつきて追悼會に

右手向の詠をたゞいまこゝにてと和田頼甫かせめこひければ  
千世までもうせぬ紀念となりけりかきのこしたる書のかすく

樹蔭納涼

上野山しける若葉の下かけは夏をよそなるところなりけり  
まみつわき風もかよひて松かけの岩根は夏もすゝしかりけり

夏懐舊 高木隆徳五年祭に

時鳥なれも昔をおもひいてゝなけはやこゑのかなしがるらむ  
かのよにもかよはゝ告よ時鳥われも音にのみなきてまのふと  
七年のむかしのけふにたちかへり鳴音悲しき郭公かな

閑庭萩

萩のはの風よりほかにちともせぬわかいほなれと秋は來にけり  
さひしきになれてはすめと萩の葉のちとする夜半はねられさけり  
さひしやとひとりことしてわかをればそよぐといふをさの上かせ

不忍池蓮花を見る

はすの花咲けるけしきは夏なから朝かせ涼し秋立ぬらし

蟬聲近秋

秋近きけしきの森の夕つゆに今いくほとかせみの鳴らむ

池蓮

朝またき起きいて、庭の池見ればあまたはちすの花さきにけり  
何とかやほうけつきては見ゆれとも又捨かたき花はちすかな  
朝ほらけすしくもあるか池水にひらく蓮のおとのきこえて  
水清し花いさきよし底すめる池にはちすのかをりみちつゝ

初秋蟲

をきのはの風より先に聞ゆなり秋まち得たる松蟲の聲  
吹そむる初あきかせにともなひて夕すしくしきすゝむしのこゑ

寄露戀

いつまてか忍ぶの草におくつゆの人まれすのみ消かへるらむ

故郷松

もろともにふりにけりとや故郷の老木の松もわれを見るらむ

寄水祝

此宿はほりぬきといふ井の水の吹わくことくよとあらなむ  
百とせもまちかくなりぬすゝか川八十瀬の波をやすくわたりて

水邊紅葉

青ふちもからくれなゐにそめてけり峯の紅葉のかけうつりつゝ

かけうつるもみちは酒にあらなくに池のおもての酔へるけふかな

名所月 郷兵舞臺

大澤の池にあまりててる月の心廣さもみゆるよはかな

雨中萩

むら雨にぬれてを折らん萩の花はれままつ間にちりもこそすれ  
ふるまゝにまたれまさりて咲みれば雨こそはきの姿なりけれ

大久保何かしの還曆の賀

ためしなき千世の翁とならん君六十はいまたうなるなりけり

暮秋露

行く秋をしたふ袂にちりかゝる露は別の涙なりけり

秋夕

何となくなみたこぼれて眞すらをのをこゝろもなき秋の夕暮

暮秋蟲 郷家兼題

をしまても鳴とはすれと秋くれて力なけなるむしのこゑかな

月前蟲

鳴蟲のこゑすみわたる秋のよいいと、月こそさやけかりけれ

深夜雁

さよ中と夜は更たれと初雁のこゑめつらしみ出てこそみれ

片戀

思はぬを思はしと思ふころにもそむきてなとか戀しかるらむ

擽衣

大原の山の秋風身にまめて八瀬の里人ころもうつなり

深夜擽衣

わさたかりいとなき頃と賤のめか夜をふかしてはうつ衣かな  
賤かうつ砧のおとそとたへけるねさせしちこやめを覺しけむ

名所海

すめ神の手向なればやいせの海に白ゆふ花と波の立らむ  
神風のいせの海へにたつなみの白ゆふ花や神のみてくら

戀

いせの海の清きなきさにひろふてふたまくにたにあふよしのなき

井上通泰か妻女死亡と聞て。悔の文に三首を。

大かたも秋はかなしき時なるをまして妻なき宿の夕くれ

なき人のかたみの衣かさねてもなほひとりねや夜寒なるらん  
蓮葉にむすひそへけむ白露を消はてにきと思ひける哉

山寺に紅葉あり。からすとひゆくかた。

うつり行秋の日數をゆく水の底まで見せて紅葉しにけり  
高雄山てるもみちはの夕はえにからすもねくらさためかぬらむ

山紅葉 松の門三草子會

むらまくれふる郷さむしみよし野の青根か峯も紅葉したけり

秋夕

かくはかりかなしき物といつよりかなかめ初けむ秋の夕くれ

月前蟲

なく蟲のこゑすみわたる秋のよはいと、月こそさやけかりけれ  
さりくす今いく夜かは有明の月になくなるこゑのあはれは  
草木さへ露にまめりてすめるよの月には啼かぬ蟲なかりけり  
長月の有明の月にまもさえて枕にちかくなききりくす  
物部かとの弓はりの月かけにこゑいさましきくつわむしかな

船中月

堀江川あし間はなれて船こけはさはる物なき秋のよの月  
菊の歌

ひとり生の一もと菊の花みれば植たるよりもなつかしきかな  
おく霜に菊はきくとも見えねとも香にこそまかふものなかりけれ  
をる袖にこぼるゝ露はまらさくのかをりにぬるゝ心地こそすれ  
あしたつの羽かひの色に咲にけり千世の友なるまらさくの花  
うらかれと見えつる野へに咲にけり千代をかけたるまらさくの花  
老

七十の坂こそちかくなりにつれされはや耳のとほくなるらむ

去年十月二十八日の大地震にうたれし人とのとふらひの祭りを催すよし。岐阜よりい  
ひおこせけるによめる。

なるの跡のやけ野は里になりぬれとかへらぬ玉の行へかなしき  
やけうせしちまたはもにかへれとも歸らぬたまの行へかなしき

庭殘菊

神無月まくれふるまで色も香もかはらぬ庭のしら菊の花  
色かへて又一盛さくの花匂へる庭は冬としもなし

咲のこるまかきのさくの匂はすは誰かひとはん冬かれの庭  
つきくに霜の後まで花さきてさくもおくある山里の庭

菊爲友

秋ことに植おほしつゝさくの花老せぬ秋の友とこそみれ  
元結におく霜寒き老か世の友はまかきのまらさくの花  
植て見ぬ秋しなければおのつからちよの友なり白菊の花  
初霜のおさまとはすをうしとてやうつろひぬらん白菊の花

秋興

秋まつり御酒のおろしに里の子かゑひにけらしなうたふこゑする

豫讓

君の仇をうたむ劔のをこゝろは橋の下にもかくれさりけり

紅葉

ひえ鳥の鳴て友よふをちかたの林の木末いろつきにけり  
秋くれは色つくものと山柿の實さへもみちにましりけるかな

殘菊

さきのこるまかきの菊ははつ霜のおきわすれたるかたみなりけり

萩はちり尾花は枯し庭の面にひとりこのれる白きくの花  
ほかに又花なきころとはつしも心ちくらむ庭のまらさく

岩上菊

うつろはて常にもかもの川上のゆついは村のむらさくのはな  
さらたにちよのしるきをうこさなきいはねにさけり白菊の花  
うこさなきいはねに菊を引うゑて千代の秋まで君を見るへき  
あま人かなつる袖とも見ゆるかないはほのうへの白菊の花  
岩かけにたかほりすてしこかねそと見しは黄菊のさかりなりけり  
さゝれ石のなれる巖に咲にけりちよのむかしのまらさくの花

夜初雪

晩稻田を明日はからんと思ひつるその夜しもこそ雪はふりけれ  
花とのみちるらむさまも見るへきををしくもやみに初雪のふる  
明なからねても見ましをさむしとて妹は窓さす夜半の初雪

閑居初冬 花雨吟社

人とはぬ庭は木葉にうつもれてあところ見えぬ冬は來にけり

時雨

いたつらに世にふる身にもたくへるは老曾の森の時雨なりけり  
風さほふみなとにつなく友舟の苦もふきあへすふるまくれかな  
ほり江川名にはかくれす鶴のみの毛しとくにまくれふるみゆ  
貝ひろふ目さしぬらして二見瀉まほの干かたに時雨ふるなり  
賤のめかいなほし延まけのふりまけのはれ行村時雨かな  
冬くれは必空のしくるゝや定めなき世のさためなるらむ  
はしたなくまくれ來にけり笠をともおもはて出し日よりなりしを  
木のはみなちりまきぬらし村時雨こよひは音の庭にきこゆる  
さらたにてるますくなき冬の日をまくれてのみもくらす空かな  
山里は雪かみそれかこのころは都もまくれふらぬ日をなき

野徑時雨

立よりて笠かりつへき家もなき野中の道にふる時雨かな  
井手今滋か郡長になりしをいはひてよみて送りける  
君か身にあまる惠の露なれのわれさへぬるゝこゝちこそすれ  
民を撫て水を治めてこそまくら高須にたてよ高きいさを

落葉

さらぬたにもろき木葉ををしほ山をしみもあへすふくあらしかな  
手まぐらのすき間の風に夢さめてきけは木の葉のちる夜なりけり

蘆間水鳥

難波江の入江の蘆の冬かれにのるはかもの青羽なりけり  
廣澤の池のあし間もこぼる夜にうきねのをしやひまもとむらむ

夕水鳥

山川の瀬をや時とまめつらむ夕くれことに鴨のつとへる  
鏡といふことを

なき君の影しうつらはますかみ朝夕みてもなくさみてまし  
老ぬれば鏡にみゆるわかかけをおやのうつると思ひけるかな  
たをやめの心の鬼のうつりせはいかにかみみの見にくからまし  
うつりけむおやのかけこそこひしけれかたみの鏡見るにつけても

従三位の君の御忌日に

御馬の口とらまし君をかむとこにぬさ奉りをかむかなし  
あはれともみそなはすらむ玉串に玉ちる計かゝるなみたを  
なからへてみあたとふこそかなしけれ此わかよはひ君にゆつらて

山 當座

もみちはも皆ちりはて、赤はたの山さむけにもみゆる冬かな

冬 月

紙屋川氷のまたを行く水も見えずくはかりすめる月かな  
いとしくさえこそまされ久かたの月の桂もまもやあくらむ  
よく見れば霜もあきたり月はかりさえたる夜半と何おもひけむ

竹 雪 十二月六日松の門の家の會當座

夜をさむみ雪のふすまにねし竹は朝日まちてやあさむとすらむ

田家歳暮 十二月十一日鈴木重永會當座

豊年の貢をはりて小山田のいほへ春まつほかなかりけり  
稻もかりみつきもをへて豊年のくれまつかなる小山田のさと  
もちひつき松もはやしてとよ年の暮にきはしき小山田のさと  
小山田の賤かもちひのきねのおとはことしもけんにつきぬとそきく  
ほた火たく山田のいほに年くれてけふりはかりにのこる冬かな

浦千鳥 鈴木重嶺會

冬かれのあしやの浦のうらかせにそよたつこゑは千とりなりけり

おきつかせさえまさるらしみほのうらの松原として千鳥なくなり  
歳暮松 郷氏

けふははや門飾りしてこむ年を松の色こそ時めきにけれ  
くれてゆく年のさかひの一年をまつとをしむにけふはいとなし  
雪中竹

吹風のすかたなからにうつもれて竹は竹とも見ゆる雪かな

新年朝

くくく 明治二十六年集

今朝よりは野山のいろも新らしく見ゆるやとしのひかりなるらむ  
はかためのけさの朝食は年ことにおなし例をもちひなりけり  
元日の朝

又ひとつとしもくひけりはかためのもちひはかりとなに思ひけむ  
緑竹久

松をのみ何かいふらむ色かへぬ竹のみとりも久しかりけり

雪にふし風に靡きてあらそはぬ竹こそ千よの姿なりけれ

竹

千尋ある蔭とさかえて此きみの經ぬへき世こそかきりまられぬ  
大空の色にならへるくれ竹のみとりは千世にかはらさりけり

巖上龜

昔のむす巖になれてみゆるかななれやむかしのをさしれいじがめ  
ことのはの道ひらけんと文おへるかめもいはねにあらはれぬめり  
君か代にいて仕へんといはかねにかくれみの龜あらはれにけり  
日の光やふしわかねはいはかねにかくれみのかめあらはれにけり  
子日する小松かもとの岩かねに龜もみとりの尾をや引らむ  
萬代を經ぬへき龜は昔のむすいはほもいまたさしれとやみむ  
おふけなく御池の岩を萬代のやとまめてや龜の住らむ

新年酒

年たちぬいさ此とそのさかつきをさしもねさへもけふの遊はむ  
吳竹のちよのはしめの年立てさしほかひするけふのたのしさ

一月九日。伊藤圭介博士をとひけるに。博士はことし九十一の齡に上りいとすぐやか

にて。よく物語し。わか爲に樂壽の大字をかきてあたへたまへり。此翁位高く家とみて。たのしみあまりある上に。命なかさきことすてにもくとせにちかし。まことに幸ある翁とこそいふへけれ。おのれよろこひにたへすして。

樂みをほかにほなにかもとむへさ命なかきを君にならば、  
貴賤祝世

宮人も田にたつしつも世をいはふこゝろひとつはかはらさりけり  
賤の身もともにいはん君か世をいのるは雲の上はかりかは  
としたては大宮人も賤のをもひとつにきみか世をいはふかな  
君か代を祝ふ心は位山たかきみしかさへたてさりけり

新年川

堀江川氷とちたるまゝなからはや年波は立かへりけり  
けさみればこほりなからによしの川はやとしなみは立かへりけり

待 鶯

梅の花咲にし日より鶯のこゑまちとほになりけるかな

月前梅

春のよの月かけきよみ目に見えぬ梅のかをりもさやけかりけり

さやかにも梅こそかをれふしみ山月はほのかにかすむ夜なれと

春 氷

下紐とこゝろたかひてひるはとけよるはむすへる春のうすらひ  
いかはかり冬に契のふかければ春さへむすふ氷なるらむ

春月朧

青柳の陰ふみみちはさむけれと春とや月のかすみそむらむ  
打けふる柳のうへにかゝれるや朧月夜のはしめなるらむ  
はつはるのうたけにゑひてかすむ目にかすみそめけり夕月のかけ

初春霞 一月二十三日鈴木重嶺發會

朝日さす高嶺は見えてふもとよりかすみそめたるふしの柴山

新年竹

雪消てもとのみとりに吳竹のかへるはとしのかへるなりけり  
雪とけてあらたに見ゆる吳竹のみとりやとしの光りなるらむ

雪中鶯聲

梅の花笠にやぬひしふりかゝる雪もいとほて鶯のなく

月前鶯



長き日をさへつりあひて夕月のかけになるまでうくひすのなく  
松上鶴 二月六日松の門みさ子の發會兼題

松のとの松の梢にすむみれは千世のところを得つるなりけり  
山吹

山川にうつりかさなるかけみれは一重も八重も山ふきの花  
山川の岩こそ波やかゝるらむさけはかつちる岸の山吹

野春雪 二月二十二日郷兵會  
かつきえてかつやもゆらん春の野の草のみとりにふれるうす雪

夜見梅 二月廿六日植松家會兼題  
小夜中にいでゝもひとり見つるかな枕にかをる梅のところを

春野  
わかなたみ小まつひくとて都人いてぬ日もなき春の野へかな

新はりの小畑のすゝな花さきて春めさわたる野への色かな  
梅

なつかしく軒はのうめのかをるかな花もや去年をさもひいつらん  
湖邊霞

あみおろすおもものゝはまの朝和にまつひくものはかすみなりけり  
すはの海の氷はとけて立わたるかすみの橋やかゝりそめたる  
さゝなみや昔のあとのこひしきにかすみなはてそまかの大和田  
さゝ浪のまかの浦かせ吹なきて音せぬ波にたつかすみかな  
近江のやかゝ見の山のかけもなしまかの浦なみかすみわたりて

獨見梅

鶯も来てとふものを梅の花ひとりみるともおもひけるかな  
伏見山霞とともに杖引てひとりうめ見るけふの日永さ  
龜井戸の梅の盛にうかれきてひとりみる口のなかくもあるかな

山春曙 文林閣

よしの山千本の花や咲ぬらむかすみもまろきはるのあけぼの  
世を捨て人のこゝろもうかるらむ花さく山のはるのあけぼの  
世を捨てすめはこそあれさくらさく高野の奥のはるのあけぼの

朝春雨 二月廿六日中島歌子刀自家會兼題

南ふくあたみの浦のあさほらけかすむとみれは春雨をふる  
春ふかき朝いの窓にふる雨はおとさへぬふるこゝちこそすれ

けふは出て花みんものとおもひしを朝またきよりはる雨のふる  
たらちねのいさめわすれてけさも亦朝いしてけりはる雨のそら

暮山霞 同く

夕はえの花の梢も見るへきをかすみはてたる春の遠山  
永き日もかすみわたりてひかし山くるは明日をいそくなりけり

鶯告春 鶯會にて

山里はまかきに来なくらくひすの聲こそはるのさかひなりけれ  
二月廿日初春の初子にあたりける日。孫玉子のうまれければ。

折しもあれちよの初子に得つるかな末も久しき松のみとり子

朝霞 江刺家會

みよしの、花の旅にやいそくらむ朝またきよりたつかすみかな  
道いそくをちかた人におくれしとともに朝たつはるかすみかな

福島中佐の歓迎會にてよめる

誰か世に人なしといふ亞細亞にもかゝるますらをありけるものを

福しま安正君の單騎獨歩。四千里のけはしさかひをこえて。其身も平らに。いま皇國  
にかへり給へるをよろこひむかへて。

天雲のむかふすきはみふみわたりためしなき名をたてし君はも

先哲祭

道の爲世に功あるうしたちを志のふは道をおもふなりけり

庭梅 三月十一日郷氏當座

うゑぬ木もなき此宿の庭なからはるはうめこそあるしなりけれ  
玉たれのうちもゆかしき空たきにかをりあひたる庭のうめかな

樹陰殘雪 同上

根にかへる花かとみればまたさかぬさくらかもとのこる白雪  
春來ては雪もおもなく思ふらむ木かくれてこそ消のこりけれ

田家柳 三月十九日黒田清綱君會

蛙なく門田の畔のくち柳それさへまゆをつくりそめけり  
わか門の苗代小田に青柳のいとこそうつれ水やひくらむ

山邊赤人 同上

たくひなく世にたかき名をふしのねの雪のうへにも立し君かな  
鳴わたるたつかね高くわかぬ浦にとめし名こそ世に聞えけれ

夕鶯 川崎千庵會

見捨ては歸りかねたる花陰に夕ををしむらくひすのこゑ  
梅見にとつとひし人はいにはて、夕まつかに鶯のなく  
すかのねの永きはる日のくるゝまできけともあかす鶯のこゑ  
人相のかねに花ちるやまてらの夕さひしく鶯のなく  
わかやとのうめにやこよひやとるらむ夕さらす鳴うくひすの聲  
ある夕に

家鳩のなくこゑきけは夕くれのかすみは雨となりけるかな

漸待花 花雨吟社

きのふけふ残る寒さもやゝさりて花まつへくもなりにける哉

春 海 同當座

礎ちかく咲ちる花と見ゆるかな浪さへはるの心なるらむ  
わたの原浪はかすみで見えねとも潮みちくらしかちのおとする

岡春草

はるくれは忍ぶかをかのわかくさももえ出て色にあらはれにけり

月の夜花を見る

やみにたに見むと思ひしみそのふの花の木末に月はのほりぬ

永からぬはるの一夜ををしむとて有明の月に花を見るかな  
此春はよるさへみよと山さくら月さかりにはなのさくらむ

花 矢田氏設座

みれとあかね花のもとには春の日もなほ永からぬこゝちこそすれ  
いたつらに櫻かさして口をくらす大宮人はなき世なりけり

春 望 四月十六日那光社京都大会

大井川入江の松をかすむなるあらしの山の花やさくらむ  
かさりなく見えこそわたれすみ田川花にかすめる水のみなかみ

暮春鳥

山鳩は雨をこそよへくれて行春よひかへす鳥のねもなし

庭上松

十かへりの花さくまでも庭の松さかゆく末は君のみそみむ

述 懐

すくなくもくふはかりなるよねしあれば世にかゝむべく腰ならなくに  
老ぬれば杖によりてもわかこしは世にかゝめんとおもはさりけり

戀

かせわたるはすのうきはのうへにおく露のみたれて物をこそ思へ  
水たまる池の塘にさす柳根もなきことを人のいふらむ  
上野に花をみて

なからへてことしも花を見つるかなうれしきものは命なりけり  
ちりくるはさなから雪にかはらねとかせさむからぬ花の陰かな  
井上通泰へ

海山のみちははるかにへたつともかすみなはてそころはかりは  
首夏風

けさみれはまた皮ぬかぬわか竹に風そよめきて夏は來にけり  
ならの葉のうら吹かへす朝風に春はかへらて夏は來にけり

晩時鳥

ふけくてもらすはつ音は有明のつきや待けむやまほしきす  
あはれとや老のねさめをちもふらむあかつきかたに鳴返とよきす  
時鳥曉やみのひとこゑは月になくよりさやかなりけり

雨後新樹

はれて後い乃こそまされわかかへて雨のそめたるみとりならねと

名所川

ともすれはにこり行世を墨田川すみはてたりと思ひけるかな  
水上のすめは未まですみた川きよきやみよのすかたなをらむ  
ますらをそ舟とのふるすみた川きよひこきする時來ぬらしも  
大丈夫かかちふりたてゝすみた川舟こききそふほる日たのしも  
言のはの道はなかれて下る世に紀の川上をたれかくむらむ  
よしの川よしや此身はまつひと清からぬ名をなかさすもかな  
首夏水

きのふかもさくらなかれしやり水にほたるとふへき夏は來にけり  
うなむ子か魚すくひ來てはす瓶に水あそひするなつはきにけり

郭公歸山

五月十九日賀島氏送別會題

かきりあれは今は歸るにまかしとやなきて入るさの山ほとよきす  
かくはかり世におしまれてほとよきす歸る山路のおくそまらぬ

庭新樹

五月十九日郷氏家會當座

花ちりて陰まけりゆく庭みれはうめもさくらもひとつなりけり  
山桐の花もこぼれて朝かせにそよくもすし庭のかへる手

平井元滿歿 六月十六日

きのふまでともに分つることの葉の道ふみたかへいつちいけむ

朝 蓮 六月二十七日伊藤新亭會當座

みる度にまつ目のさめて蓮葉の朝露ことにめつらしき哉  
花ひらくおともきこえて朝ことのめさまし草はちすなりけり

蓮

朝ほらけ水におとして蓮の花ひらくるみれはすしかりけり

泉

あし引の山路くるしき夏の日は岩もる水やいくすりなる  
柴のいほのめぐりの竹のいけ垣にたちのひたるはことし生なり

川夏月 文林閣七月探題

ひるのまのあつさなかれてゆふは川なみ間にうかふ月のすしさ  
うかひ船今はと歸る波のうへにうかひ初たるなつのよの月  
長良川うかひのかかりかけ消てふけたる月のかけのすしさ  
影なからむすすしき山のわのあかても月のふけにけるかな  
ふけぬれば風も出るかすみた川月はかりたにすしきものを

長良川よひの鴉飼のあとみれは月より外の物なかりけり

題不知

ならのはのかへる隙よりもる月は光を風のおくるなりけり  
月かけのすししく見ゆる野へなれば露ふみわけてゆかむと思ふ  
風のおとをさくもすしき松のうへに月さへこよひのほりぬる哉  
あまりにもすみふかしてかへるさは月と二人になりける哉

螢入籠

夕風の吹いるとにいよすたれいよくまけくとふほたるかな  
巻あけて月まつ宿のをすの内をまつてらしてもとふほたる哉

早苗多

手もたゆくとるや早苗の多かれは田にたつ民のいこふ日もなし

水邊螢

いさゝ川さゝれをわけてゆく水の末さへ見えてとふほたるかな  
ぬれてたにさえぬ螢のちもひ川なにふかめてもえわたるらむ

田邊螢

けさ植し門田の苗にいとはやもおく露見えてとふほたるかな

風わたる小田の若苗つゆちりてほたるかすそふ夜半の涼しさ  
樹陰夏月

ならの葉のかへるひまよりもる月はひかりを風のおくるなりけり  
兔

長き耳ふりたてなから世の中のうさはさかすや山にすむらむ  
椿

此との、玉しく庭の玉つはき八千代をかけてみそなはすらむ  
わかせこをこちこせ山の玉椿はやもとはなむちりもこそすれ

夏夢

月かけのさしいる窓にかけてけりすしきよはのゆめのうき橋  
夏のはしるなからのうたねにかけてみしかき夢のうき橋

夏草 七月七日

白つゆのおき所とやまけるらん秋も間ちかき野への夏草  
みまくさにかりてかはまし夏くさを駒にふませて君もとはなむ  
秋まちて花もこそさけ夏くさのまけるをさのみいとはさらなむ  
五月雨のはれはぬきてと思ひしをかるへくなりぬ庭の夏くさ

一六六

かくれかにかりも拂はぬ夏くさは物くさとこそいふへかりけれ  
一六七

松下納涼

あつき日にけはしき山ちあへき来て一すゝみする松の下蔭  
夕風をたつねてきつる松かけにとく来てすゝむ人もありけり  
すゝしさのいつこはあれとまつ蔭のまみつそ夏の命なりける  
風かよふ岡への松の下かけはいつともわかすすゝしかりけり

柴舟といふ石を見て

松浦川なにの思ひにこかれてか此柴舟の石となりけむ  
晴はたる空やうれしき庭の鳥よき日よくとひなの鳴なる

井手今滋より文にて「うき雲のかゝるとしらは山のはをかねて出てぬ月ならましを」と  
いひこしけるに。

うきくもはかゝるともよしてゐる月のおもひあかりてこゝろすまさむ

蟲 矢田兵衛

秋たちて一むら雨のふりしよりすゝしくなりぬ鈴むしのこゑ  
さやかなる月夜なりけり鳴むしのこゑさへ空にすみわたりつゝ  
草むらにもえし螢のちもひにやこかれて秋のむしはなくらむ

夕立

鳴神のおとにひききてみよしの、瀧もとゝろに夕立のふる  
世中のうさもあつさも夕立の雨一時になかしつる哉

萩

宮人の袖つけ衣にほふまで御その、まはき花咲にけり  
高まとの野のへのま萩さきにけり尾山のみやに秋たつらしも  
雨によりとく咲にきとみしほとにかつちりそめぬ秋はきの花  
いつをかも盛とは見むふる雨のさかせてちらす秋萩の花  
さく花の千種はあれと秋ののは萩の錦にまぐものそなき  
九重の玉まぐ庭にさくみれば萩はまことにしきなりけり

霧隔紅葉 十月八日古川知足會無題

山ひめのちりてかけたる紅葉のにしきたちさるけさの秋さり  
ふるたひに時雨のそむるもみち葉をねたしとさりやたちへたつらん

初紅葉

いにしへの下照姫の思ひにやこかれてそむる紅葉なるらむ

雁 井手會

聲たえすはつかりかねを聞ゆなるこよひいくつらなきわたるらむ  
ありし世をおもひつらねて秋のよをなきこそわたれ天つかりかね  
君まさてひとりなかむる夕くれになきつれてこそ雁は來にけれ

月下菊

久かたの月の光を匂ひにてまかきをてらす白菊の花  
月清み空にきえゆく星かけをまかきに見する白菊の花  
暮たれば月の光のかさなりていよ／＼まろし白菊の花  
あひにあひてことしの秋はてる月の盛を菊も盛なりけり  
折しもあれ秋のち中に咲出て月の盛に匂ふしらさく

對月言志

むかしにも月のかみみはかはらねと見し世のかけはうつらさりけり

月前擗衣 十月十五日郷氏會

かくはかりをしき月夜を賤の女もねては明さすうつころも哉

初雁

いつしかと穂にいて、けりわか門のわさ田かりかね今やきぬらん  
雲晴て月影きよし遠つ人かりもこよひはなきて來なまし

水なかれたる所菊さけり 十月廿二日大田家の會

香を留めて來たるもまゐるく谷川の流はさくのしつくなりけり  
平田大人の年祭に。殘菊。

いく秋かかけうつすらむ谷川のなかれに匂ふ白きくの花  
かけうつる水はなかれてかはれともかをりは千代のまらきくの花  
かけ見えて岸の白菊さきにけり水の秋こそふかくなるらめ  
いさゝ川水より秋のふかければうつろふさくのかけそあまれる  
蔦紅葉

うつ山の山夕こえぐれば紅にもみち下てるつたのほそ道  
十三夜にあたる夜。月をみて。

昔より此長月のなかき夜をまちてや月のさやけかるらむ  
物ことにおくれゆく身は長月ののちの月こそまたしかりけれ  
秋ふかく成行まゝに長月ののちの月こそさやかなりけれ  
長き夜をあかて見よとか長月をまちてや月のさやけかるらむ

秋 庭 十一月七日新波正近會兼題

植捨し小萩葛花 花さきて野となる庭のちもしろき哉

一六〇

野となるもよしやわか庭秋くさのまけるまにく花はさかせむ  
さゝくりの庭にまろひてゑめりけり雀もとる秋のひよりに  
たのしげにをとるか秋の庭雀稻つく賤かうたにあはせて

開 雁 同く

つくくどむなしき空をなかめつゝさしてこそをれ初かりのこゑ  
秋風につらをみたしてゆく雁もこゑはひとつにきこえけるかな  
あはれともさく人そなきうつせみの此世はかりと空になけとも  
玉章をかけてこしちのぶとつれもさくこゝちする 初雁の聲  
此秋はわさ田もいまたからなくにはや聞そめつ 初かりのこゑ  
老の身のはなれうくする朝床をいてこそきけはつかりのこゑ  
永き夜のねさめくくに聞ゆなりいくつらかりのわたり來ぬらむ

碁

まけしとてかたみにきそひうつ石はたしかちくとおとの聞ゆる

終日對菊

菊の花さける宿には秋の日のくれ安きこそうらみなりけれ  
とく起て朝めさますと出て見し菊のまかさに日はたけにけり

一六一



朝露のひるまも過てさくの花見るくつひに日はくれにけり

露光宿菊

老ら菊の上にあかすは白露の玉のひかりもむなしからまし  
さく菊の花にやとりて老ら露もちよの光をみする宿かな  
朝なく玉かとみえておく露の色まできよし老ら菊の花

翫菊延齡

老にけるまわも齡ものふはかり菊をかさしてたちくらしむ

菊香隨風

菊の花咲初しより秋風のかをる庭ともなりにけるかな  
菊の花かさせは老もかくれけりのふらむ齡かきり老らすも  
中垣のあなたに匂ふさくの花風はへたてすさそいさにけり  
ともすれはもみち葉さそふ秋風にうれしく菊のかをり來にけり

菊閑中友

花さかぬ秋しなればわかやとのちよの友なり白さくのはな  
世の中の友はあもはす白さくの花にむかひてけふはくらしつ  
よの中の人目は枯し草垣にわか友得たる老らさくの花

七草のかすにもれたるさくを植て世を背く身の友とこそ見れ

菊花滿庭

御苑生にみちても風のかをる哉けふこそ菊はさかりなるらめ  
とふ人のなきわか宿は日もなかしあくまでにほへ老らさくの花

殘紅葉

谷かけに残るにしさの一ひらはあぐれて染し木末なるらむ

炭かま

鹽ならてやく炭かまもからき世にたつにはあなしけふりなりけり  
民の戸の賑はふまゝにすみかまのけふりさへこそ立まさりけれ

從三位公の御忌日に

けふといへは同じ涙に袖ぬれて昔まのはぬ人なかりけり  
おもひいつることのみけふは大久保の里の木枯しうちしくれつゝ

寄菊祝

秋をへて老せぬさくの花しあれば君かやとには千世やかさねむ  
咲にけり花のあるしといつかれて君はちよまでませの白菊  
ことしよりちよのさかりをこのやとにむすひそめたるさくの白露

秋ことに菊をかさしてきくよりも久しき世をそ君はへなまし

名所紅葉

瀧の川なかれに移るもみち葉のいろさへふかくなれる秋かな

葉分風 菊の名

そことなく葉分の風もかをり来てさかりまらるゝ菊の花園

寄雪祝 十一月十八日佐々木吉信七十賀

ふる雪に老はかくれて七十のかしらにむつの花さきにけり  
かきりなきよはひへふしの白雪の高く久しくあるへかりけり

月前千鳥

霜をふむかも川堤人たえてふけたる月に千鳥啼なり  
浪の上に月かたふきて住よしの松原遠く千鳥なくなり

時雨 瀧氏

ふくかたに又さそはれてわか山のあらしの末にふるまくれかな  
あらしのみ吹とちもひし松の葉のまつくによるのまくれをそきく  
さらぬたに冬の日かけのみしかきをまくれてのみもくらす頃かな  
まつの女かうすつくおともうちしめり門田のいほもふるまくれ哉

夜残雁

鳴わたる空や雪けになりぬらむふけて門田に雁のあちくる

歳暮竹

なへて世はとしのくれとてさわけともそよともいはぬまどの歳竹

早梅

雪の内に軒端の梅もふみそめてはるまちかほにみゆる宿かな  
となりまて春や来ぬらむ中垣のあなたにうめの花さきにけり  
あし引の山ふところにつままれて冬より梅の花さきにけり  
雪深みさかしと思ひしうめの花かつくけさはかをり初たる

埋火

埋火はつきて炭をもさしつへしきえかゝりたる身をいかにせむ

年のくれに

のとかなるけふのまとるにわかやとは春になりたる心地こそすれ

雪のふりたるあした

行人はたえたる橋の霜の上に月はかりこそさえわたりけれ

井上通泰か姫路に行くを送るとて

天つたふ姫路のさときく時は雲ぬのよそのこゝちこそすれ

明治集明治二十七年筆

新年鶴 一月十四日諏訪氏定日

年立て豊さかのほる初日かけ匂へる空をたつ鳴わたる

待 鶯 競點郷氏

梅の花また咲かすともわかやとのまつに來てなけ鶯のこゑ  
いつまでかつれなかるらむ鶯のこゑまつかきに梅かをりきぬ

蝶 同上

飛蝶の花にやとれる一ねふりわか世の夢もかくこそ有けれ  
菜の花に蝶よとまれとうなる子かおひつおはれつゆく野道かな

一月七日向島秋葉社へ参詣す其邊の櫻の冬枯物さひしく秋葉の森も松はかりみとりに見ゆ

年立ていくかもあらねときてみればこゝろははるに早むかふ鳥

試 筆 一月八日花雨吟社當座

とり初ることしの筆のいのち毛もなほ長かれとかさていはしむ

新年竹 一月十四日諏訪家當座

松をのみ何かはいはむとしたては竹の緑もいろまさりけり  
たわむまでつもりしこそ雪とけて竹のこゝろもわかへるらむ

新年田

すきすてこそそのまゝなるあら小田をかへしもあへす年はかへりぬ

新年鶏

曉の鳥の八こゑも花やかにとしたつけさの空をあげゆく

初春梅

たれも皆春の始へられしきをまつゑみそめしうめの初花  
けさははやもらすかをりに梅の花春になりぬるこゝろをそまゐる

雪

ふる雪に御階の櫻うつもれてむつの花さくこゝのへの庭  
うつもれぬこゝろのまつをまをりにてとへかし庭のけさの初雪

新年山

夢にたによしといふなるふしのねをとし立けさの空に見るかな

社頭梅

ひかしにもまさるいかきの梅の花神もうれしくみそなはすらむ  
そのかみの光をあふくみつかきにむかしおほゆるうめか香そする

わか水 一月廿一日黒川家筆題

汲あくる初わか水にあたらしき年の光やまつうつらむ

松上鶴 同上

朝日かけ今さしのほるまつのうへに羽ねさしのへてたつの啼なる

新年聞鶯

立かへる年もうれしくうくひすのこゑさへけさは聞えけるかな  
いとはやも啼鶯は谷の戸を年とともにや立いて、來し

柳

あれはてゝ庭は野となる古郷の柳いつまでみとりなるらむ  
故郷の野となる庭のくち柳たてるあたりやあさねなりけむ  
こく船の苦にはらくおとするは岸の柳のまつえなりけり

題不知

春風に水のこゝろもちとけて氷流るゝはるの山川

阿部直輔のもとめにしたかひて。寄梅祝といふことを

よろこひのあるへき宿とまるさかなまかきの梅の花のゑまひに  
春毎に老のこゝろをなくさめて干とせもかをれそのゝ梅かえ

山残雪

住よしの松のけふりはかすめとも雪また白しきらのとほ山  
つくは山また消かての白雪の薄くなれるやかすみなるらむ

贈梅

さかりには君きませとて梅の花またしき枝ををりてこそやれ

雨中鶯

ふる雨にぬるゝもまらす青柳のかけにきてなくうひすの聲  
つれくと雨のふる日の一ねふりさめたる窓にうくひすのなく

夜梅

三月四日黒田清綱氏月並合筆題

梅の花さやかにかをるはるのよみやみもあやあるこゝちこそすれ  
はるの夜はそこともわかすくらふ山まろきやうめの梢なるらむ

春月

三月十六日伊藤信行會

花の陰まつかに駒をあゆませて朧月夜にゆくは誰子そ  
大かたもかすめる空を月はかりおほろよなりとおもひけるかな

待 花 同上

のとかなる春ともいはいはすいとなきは花まつほとこのころなりけり  
まつほとに春も半はくれにけりさきなはさくら久しからなむ

浦春月 諏訪家

立のほるけふりの末にかすみけり浦の鹽屋の春夜の月

花満山

みよしの山にあまりてさく花は一目千もとのさくらなるらむ  
よしの山さはかりひろき岑にをに咲きあまりたる花さかりかな

花交松

あらし山このまの松はさく花にうつもれてこそあらはれにけれ

花半開

咲きそめてまたなかはなる櫻花さかりまつまそたのしかりける  
かた枝まつほころひそめしいとさくらさかりならぬもめつらしきかな

落花

おのつからさかりすきゆく日かすにはあらそひかねてちるさくらかな

庭落花

櫻花ちりしく庭をふみ分けて風より後にとふ人もかな

夕雲雀

山のはにおつる夕日をよそに見てなほ空高くなくひはり哉

海邊暮春 四月廿日家會當座

はてもなき青海原の波路にもかきりはありて春のくれぬる

春哀傷 四月二十八日林信立道懷會當座

櫻さく春の此頃君まさはいかにたのしきまとむならまし  
あたなりとなにおもひけむ花よりも人こそかくのはかなかりけれ

藤

行水の上になひきて見ゆれともなかれもやらぬ藤浪の花

燕

まつかなる軒端たつねてすをつくるつはめも心あれはなるらむ

岡新樹

あしなへてまける青葉にわかをか松のときはも夏めきにけり

松 矢野氏夫婦の祝

相おひにさかゆくめをのふたならひこれや高砂住の江のまつ

雨中時鳥

いにしへをなれもこよひのふらむこゑふりたて、鳴ほととぎす  
橘の花ちるくれのむら雨にまのひあへすやなくほととぎす  
村雨の雫ひまなき梢よりこゑもこぼれてなく時鳥  
林陸夫ぬしに年をへたて、あはさりしを。けふしもゆくりなく高崎正  
風大人のもとに。ほしか岡にいてあひて。五月五日

簾 葵 黒田家

棚機のみつてふ星かをかにして年に稀なる君をみしかな  
わきも子か里のすたれのあふひ草心をさへもかけてみるかな  
宮人のかさしもあれとあふひ草みやひのをすにかけてなりけり

旅館鶏

明くるまつ草の枕に鳥かねのきこゆる計りうれしきはなし  
一夜かる野上の里のかり枕あくるわひしき鳥かねをする

首夏水 大口氏當座

卯花の雪ちるにはのまし水にすしさうかふ夏は來にけり  
すしけになひくわか葉のかけ見えてまつ夏めくは清水なりけり

大久保にて

出て、來る花見をとめかものすそのいろにまつし今さかりなり

橋邊藤

わかやとの松の藤浪さきしより立人おほしまへの棚橋

蛙

故郷の田中の井戸の草かくれところ得かほに蛙なくなり

水邊卯花 五月二十一日郷三位月並

松かけの清水むすへは卯の花の波こそ袖にまつかゝりけれ  
卯の花かそれかあらぬか玉川の氷より上に波のたてるは  
玉川のぬせきをこえてつみまであふるゝなみはうつきなりけり

夕卯花 金子元信家會

まつ人の袖かあらぬかたそかれにほのくみゆる垣のうの花  
おほつかなかはたれ時に待人の袖かとまかふ庭のうの花

新 竹

やゝあつくことしもなりぬ立よらむ陰にはやなれ庭のわかたけ  
いとはやも皮ぬきすて、竹の子のわか葉さす枝のかせのすしさ

夏 花 五月二十六日江刺恒久會

梓弓いよしのはなの清き香にこゝろひかれぬ人なかりけり  
時めきしさくら山吹花ちりて夏のそのふにさくやくのはな  
草花はなつこそよけれ朝つゆにほふ姫ゆりやまとなてしこ  
くひな 坂正臣會當座

月きよみ舟こきゆけは隅田川さしのあし間にくひな啼なり  
千町田の末までみゆる月かけにいつこなるらむくひななくこそ  
澤 燈 六月六日黒田清綱月並

山家友

夕月は森にかくれて澤水のをくらさかたにとふほたるかな  
大みよにみな出はて、山にすむともいまれにもなりにけるかな  
眞柴かるをちを友にて明くれにかたるもやすし山かけのいほ

夕 立 古川知足會

よさの海に日はてりなから夕立のくもたちわたる天のはし立  
なりわたる其神山のゆふたちに末こそにこれかもの川みつ  
撫子帶露

たらちねのもろき涙もかゝるらむぬれて露けきなてしこの花  
庭 燈 水原

やり水のかゝりは消て更る夜の庭をてらすいほたるなりけり  
いつみ

道のへのこのまつかけのいはまみつこまにもかはむ我もむすはむ  
なくせみのこ糸のまくる、松かけになかれいつみの水のすゝしさ

夏 河 同上

うなる子かつるはきにして里川の瀬にたつ夏になりけるかな

夏月涼 伊藤新當座

ふり過ぎし雨はかりたにすゝしきを雲間をわけて月も出にけり  
夕立の過にしあとのすゝしさをひとりしめてもすめる月かな

寄 絲 祝 ある人の賀に

たをやめかひく白絲の打はへてなかきよはひをきみは経るらむ  
松竹契佳年といふことを 佐渡國三國氏の賀に

松の操竹の一ふしあるをみてちよをや君かちさりおくらむ  
色かへぬ松にならひて吳竹のみとりもちよの春にあふらし

竹下康之か父母の賀に

いくちよの色をくらへてさかゆらむたちならひたる宿のくれ竹

田家月

秋風にいなはの雲はうこけとも月はさやけし小やまたのいほ

十五夜

陽曆九月十四日に神戸の行在所をおもひやりて

大御代のひかり加はる秋なれば月もこよひはすみまさりけり

天皇のみいつか、やく大空に月もこよひや光そふらむ

田舎の十五夜

にひ芋にもちひとりそへ月よみをまつにこよひのかけのさやけさ

風前薄

吹過るかたをまねきて秋風のゆくへをしたふ花すゝさかな

月前蟲

故山田正誠の一周年を上有知の里にてものしけるに

めぐりあふこよひの月のかなしきにわれをなかするむしの聲かな

君志のふやとにさしいる月かけをかなしきものと蟲もなくらむ

鹽竈烟

河原左大臣融公の千年忌に

君まさて千年經にけんまほかまのうらかなしくもたつけふりかな

河邊菊 同上

ちよをへし昔のかけを移してもさくうかはへの白さくの花

初秋風

横山某一周年追悼會に

ちりうせし去年の一葉を惜むまにことしも秋のかせたちぬなり

夕 蟲

草むらにひるも聞ゆるむしのねのなと夕くれはかなしかるらむ

夜 蟲

月はてりむしはなくなる秋のよをみるときくとにふかしつるかな

賤か家の秋も夜さむのさりくすいひたくかまのもとになくなり

豊島夏海の追悼會に。秋夜夢といふことを。

秋のよのなかさかひこそなかりくれたとる夢路に人しあはねは

名所月 郷三位家會當座

さすらへて見しいにしへやいかなりすまのすまひの秋のよの月

すみた川夕こさいて、白ひけの森をはなる、月を見るかな

曉初雁

老か身のとく起出てさし櫛のあかつきにきくはつかりの聲



萩すゝきみなうらかれて秋の色をひとりまめたるまらさくの花  
咲しより人にとはれぬ朝もなしかれとてこそ菊はうゑしか  
此朝明霜やあきけむさせわたもさせぬに白しまら菊の花  
山かつの竹のまかきのあらければひまより見ゆる白さくの花

寄菊祝

大庭のさくのうたけの花むしろ君か千歳をまきしのふかな  
咲つく御苑のさくに見つるかな君か千とせの秋のさかりを

蟲

やき太刀の秋の霜こそ寒からしきりはたかてふ蟲の鳴なる  
加島宣普の遠つ祖の二百五十年祭に。菊露深といふことを。

遠つ祖の深きめくみにうるほひておくつゆまけしまらさくの花

里 砧 諏訪忠元月並合に

旅にあるつまの夜寒を夢に見てねさめの里にころもうつなり  
ゆく川を中にへたてゝからころもうちかはすなりうちの里人  
うつらなく野への秋かせ小夜ふけて衣うつなりふかくさの里

あのかすむ里の夜寒をとおたてゝよそに忘れとや衣うつらむ

千鳥

夜やさむきつまやつれなき芳野河ふけゆく月に千鳥なくなり  
皇軍に従ひて行人のころを

いつかわれありなれ川に水かひて支那のあら野を駒にふませむ  
のこりとくまれる人つまの心を

このころはこまかまなかと御いくさの進み行ささいはぬ日そなき  
大君は神にしませは日の御はたむかふところにあたなかりけふ  
皇軍はやかて神かも陸にうみにいむかふあを打くたきけり

杜紅葉 名古屋邦光社合

にきはひしまつりの後はもみち見に来る人もなしうすすなのもり

待紅葉

染なはといひし都の友ゆるにまたるゝものはもみちなりけり

暮秋霜

あさちふの露のかたみと初霜をちきてや秋のくれて行らむ

鷹 坂正臣か家の合に

鷹 坂正臣か家の合に

大ふねの此たかちほを山とみてあもり來にけむくしき此鷹  
皇軍はすてにかちぬと早ふさのはやくも知りてかけりきぬらむ  
大矢氏の新婚の歌よめとあるに

うるはしきあらしの弓につかふ矢のたくひに中はちよもかはらし  
源義經

山紅葉

みちのくの空にをしみし影なれやまかちの奥にありあけのつき  
たけかりに出にしものを秋山のみちのみ見て目をくらしけり  
まほ原の奥の山里いかならむにはの一木も紅葉するころ  
家つとにいてその木こり腰にさすよきもみち葉をきりて得させよ  
このもとにひさこかたけてうま酒をみわ山もみちいろに出にけり

祝捷軍 十一月二日平田神社の例祭に盛嵐かもとに招かれて献詠せる歌

城をぬき船をまつめて陸に海にひとしくよはふ萬世のこゑ  
千世まで光なるへしもろこしの草木もなひく君かみいつは

初冬 冬 十一月十日矢田饗家會

賤のをか門のちくて田かりいれてほしあへぬ間に冬は來にけり

皇軍のはたてのかせにふす草の霜かれ見えて冬は來にけり  
もちみ葉のちりかひくもる朝かせに道もまとはて冬は來にけり

初冬風

吹ゆるす朝かせ寒し立田山よ半にや冬のまえて來つらむ

久米幹文か十一月十日身まかりけるに。其世に在しほと。わか爲にかきて贈れりし歌「わか  
宿の松にかゝれるさるをかせ心なかさをたれにならへる」とあるを見で。追悼のころぞ。

ときはなる松にかゝれるさるをかせこゝろなかさをならはさりけむ

楫宿新春か今年の納會に。菊盛久といふことを。十一月十一日

もろこしのはてまでかをるひのもとのさくのさかりそかさりまられぬ

曉千鳥 十一月十二日諏訪氏庭

ほり江川中洲をこゆる明かたの沙先見えて千鳥なくなり  
有明の月かけくらきはなれ洲に風なかれしてちとりなくなり

志のふもち摺の歌はれて。やかて其志のふすりのふくさひとつを贈られむ。

みちのくに今もありてふ文字摺はむかしをまのふつまにそありける

河 氷 十一月十八日黒田清柳家會

里の子か來ては氷くむわか門の小川もけさはこほりぬにけり

君か爲草むすかはねもろこしのはらにさらさむ時は來にけり  
ありなれに水かひをれば風さむみ駒をいなく家こふらしも  
日の御はた支那の都のたゝ中にたてすはやましすゝめますらを  
もろこしの都ゆすりて皇軍のかちときあけむ日は近つきぬ  
もろこしのあたことむけて御軍のかへりこん日をいはひてまたむ

社頭櫛

櫛葉のさかゆる陰にまとゐして神の恵をあふくけふ哉  
いく千代かふるのやしろのもと櫛どもの根さしをまゐる人のなき  
うつり行く世の冬の霜雪をよそにみむろの神のさかき葉  
神かきの一もとさかき霜入たひちけとかれせぬ一もとさかき

從三位公の御忌日に

もろこしの草木もなひく大御よをみるにつけても君そこひしき  
水くきのきよき御あとをあふくにも流るゝものはなみたなりけり

朝氷 十二月一日花雨吟社

くみいれて今朝手あらひし水跡のみつさへやかてこほりぬるかな

江鴨 十二月二日黒田清綱氏月並納會

山の名のあらしやさむき大の川いり江の鴨のこゑのひまなき

冬祝言 同上

天の下賤の子らまで御いくさのかちのほこりにいさむ冬かな  
大みいのもろこしまてもくはゝれるみよの榮えをいはふ冬かな

寒流帯月 十二月九日加藤安彦會

千鳥なくみたらし河に影見えてふけたる月のかげのさむけさ  
木葉みななかれ盡して山川の水にうかへる月のさむけさ  
白雪のうつみのこせる冬川の水ひとすちをてらす月かな

寄竹懷舊 松の門みさ子のもとによりて、三河人某の二百五十年忌なりとて

よそにてもさしてそまのふ呉竹の世にとめたるこの君の名を  
十二月九日。東京の市中。第一回の戦捷祝會をひらきて。盛に賑やかなりと聞て、  
いさやこら君かようたへ此冬は軍もかちぬとしもゆたけし

落葉浮水 十一月二十八日郷三位月次當座

染つくす紅葉は池にちりまきて水の秋こそさかりなりけれ  
あらしふく池のかゝみのもみち葉はちりかゝりてそてりまさりける

待雪

たしならぬさむき時雨のあしたかないつ初雪はふらむとすらむ  
人目さへかかれてさひしき草の戸にゆきまつほかのなくさめそなき

風前歌 十二月六日上杉義順會

いたつらによくと思ひし木からしの風はあられをさそひきにけり

池水鳥 同上

うなる子か石つふてうつ池水になれてさわかぬをしも有けり

年のまじく 明治二十八年集

新年雪 一月六日千成會

松竹もまめもことしはうつもれて雪こそかとのかさりなりけれ  
あたらしき年の始のはつ雪をふりたるものと誰かいふらむ  
あたらしきとしの初日にかつとけてわか門松の雪そこほる

始聞鶯

谷水に耳を洗ひてうくひすのはつ音まつさく山の下のほ

鶯はとくやなくらむ老らくの耳にはけふそ初音なりける

寄海祝

青海原もろこしかけて八汐路の末までやすき君か御代かな

朝鶴

よこ雲の空にさこえてほのくとあけわたりゆくあしたつの聲

初春霞

春といふまゐるしばかりにみわの山かすみそめたるみねのすきむら

二月。岐阜より歸る時。汽車中の作歌。

大井川水さへかれて岸にたつくぬきのかけもなくなりにけり  
犬るかば水はほそりて石はかりみゆるかはらの風のさむけさ  
かねてより思ひおきつのうらつたひこころもはせて行車かな

尾崎実夫のまゐる人に汽車中に出あひてことづく

花さかは必つけよまかねちの車はまらせわれ見にゆかむ  
年々にすみた川への花はみれとあらしの山をえこそわすれね

春 三月二十日植松會

ゆけどく猶行ささに霞むなりすみたつみの春の夜の月

永き日も花見くらして朧夜の月のかけふむまかの山を  
大の川花のなみまに棹さして入江にかすむ月を見るかな

春曉月

花のいろのほのくまらむ山のはにあくるもまらす月のがすめる  
空の海風ものとかにすむ夜の月のみふねは行としもなし

春草 三月廿六日江刺會

なしくさもつみかてにせしはるの野にはや百千草もえ出にけり  
若かへり春のみとりになりけりもゆる老會のもりの下草

野殘雪 郷氏當座

白妙の袖かとみえて春もまたわか菜つむ野に雪の残れる

春川

すみた川花の波間のやかたふねうきてとみゆる人のこころも

思花 四月一日植松會

まらくもとまかふさかりは櫻はなおもふころも空にこそなれ

宇治の名所 當座

世にいてぬ身をうち川の龜石はそこにまつみて幾世へぬらむ

松上藤 四月五日河合さき子會

まつはれて老木のまつに咲にけりわかむらさきのふちなみのはな

朝花 四月十三日伊藤信行會

起出てまつか手あらふ朝川にうつるもをしき花のかけ哉  
よしの山みねに朝ゐるまら雲は見るく花になりけるかな  
茜さす月はまたいてぬ山のはのあくるひかりはさくらなりけり  
うまくるま人のゆきしもまけからて朝こそ花は見るべかきけれ  
さくら花をらははけさこそをるへけれきのふのつほみ皆さきにけり

臺灣入我版圖

わか國の物となりたる高砂の島はうごかし萬代までも  
かねてより神はまけむ高砂の島も御くにの物となる世を  
すめ神の八十つなかけてたかさこの島もみくに引よせてけり  
花のうた

七日ともかささらさりけりあそくとくささちる花はぐらす日かすは  
隅田川人もまた出ぬ朝かけの花をのとかにひとみるかた

蛙

はれなむやあすのいかにと夕くれの雨見て居れば蛙なくなり  
なか爲に引し水とや思ふらむなはしろ小田に蛙なくなり  
山吹のかきのあなたになはしろの水かけ見えて蛙なくなり  
賤の男かあけ田につくる菜の花のかをるゆふへに蛙なくなり  
花下送日 花雨吟社

野外花

四月七日黒田清綱會

かのみゆる野末のさくら咲きぬらしけさはかすみの色のことなる

深夜蛙

四月十三日いふすき近春會

水くるませとにうすつく音やみてふけゆく夜半に蛙なくなり

花間蝶

四月十五日諏訪五位方

うなる子か来てはあへとも咲花のかけをはなれす飛小蝶かな

寄草戀

かくとたにいほぬ心のおもひくさつみてまられは嬉しからまし

菜花

四月廿三日松の門會

山はたにやせて花さく一もとのすくなもはるのいろにやはあらぬ

水邊花

四月廿四日郷氏家會

水のもととはたつ人まけしすみた川船より花は見るへかりけり

落花淨水

伊藤信行會當座

吹ぬらむ嶺の嵐をよしの川ちりうく花のうへに見るかな  
津のうへにやまはしとまるらんうきてなかれぬ花もありけり  
行水のあわとみるまで櫻花ちりてうかへりうき草のうへに  
かくはかりうきたる花のころともまらてや水のさそひそめけむ

故郷菫

四月廿六日郷三位月並會當座

おもひ出ることのみおほしふる里にむかしすみれの花をつみつゝ  
かきりなき野となりにけりすみれさくあたりやにはの名残なるらむ

残春

四月廿六日江刺恒久會

あそさぐらにほはさりせは菫残るはるもむなしき日かすならまし

暮春山

四月廿八日宅の兼題

もゝの花さく水源の山人は春の暮るもまらすや有らむ  
よしの山花のよききに跡たをてくれ行はるの道もまられす  
都出てけふみかの原くれて行はるに一夜のやとりかせ山

おほつかなたつきもまらぬ山中をいつちに暮てはるのゆくらひ  
さくら花みなちりはて、足柄のせきのやまちもはるはとまらす

寄歌祝 播道守發會のおくれたる懸を祝をかねてなるへし

ことの葉の道によき名はたち花の家のかとこそ久しかりけれ

藤 四月廿八日宅の會當座

わか宿の松にあまりて夏にさへさきかゝりけり藤なみのはな  
もとえよりかつ咲初て藤の花うらは夏こそさかりなりけれ

蒙古敗北

わたつみの沖つ大浪たちまちにうちくたかれしからのあた船

首夏月 坂正臣會五月五日

うちなひくわか葉のひまに夕月のほのめくかけも夏めきにけり  
夏來ればわか葉さすらむこゝちして月のかつらのかけのすしじさ  
卯の花の咲ちる庭の夕月夜かけおもしろき夏になりぬる

首夏盤

里川のなかれにほたるふたつみつとふかけ見えて夏は來にけり  
苗代のなかれに盤とひかひてゐなかははやく夏めきにけり

瀧下盤

岩根よりちちくる瀧の白糸のたえく見えてとふほたるかな

くひな 坂當座

みしか夜のあかつきつくよさやかにて明るもまらす水鶏なくなり

扁舟暮歸

友ふねは大かたかへりはてにけりいさゝをとらむ日も暮むとす  
いかはかりけふの海さち多からむくれてそかへるあまのつり舟

鎮遠を見る 八月廿九日

わか國のものとなりては諸越のふねも光のそふこゝちする

河 月 十月六日古川知足家會

まさのままはるかに見えてうち川の川上とほくすめる月かな  
久方のかつらの川の月かけは空にすむよりさやけかりけり

名所紅葉 十月八日水原みさ子會

さはかりのもみちならねと都には名そなかれける瀧の川かな  
とし毎に見ることにして見るものはたきの川邊の紅葉なりけり

十月十二日。小中村博士の身まかりけるをいたみて。

草のうへの露ときえてもきら玉のひかりはなかく世にのこるらむ  
をしまれて消にし露のきら玉はのこる光やかたみなるらむ

夕紅葉 十月十五日 藤原元合

夕はえのいとまさりてからにしきたまくをしきもみち葉のかけ  
神嘗祭

年もよし世もゆたかにて神なめのけふのまつりにあふかたのしさ  
空はれて秋風さよし神なめのみてくらつかひけふやたつらむ

夜時雨

夜もすがらまきの板やにもるまくれ月にかはりてはれなましかは  
かさくらし時雨ふる夜となりにけりたそかれまては月も見えしを  
新室を造りて。其たかさ屋にのほりて。はしめて不二山を見て。十月三十日  
かさりなく心はゆきぬ高きやにはしめて不二の山をみしとき  
わか宿はいふせかれとも高屋にのほれば不二の山を見えける

不二山

日の本のたかさころを久かたの空に見せたるふしのきは山

山 霧 十一月二日 藤原元合

深山へのはれたる日たに淋しさをきり立ちめし秋の夕くれ  
朝なくまさたつ山にたつきりのたぬ日もなくなれる秋哉  
まかねちのすゑはとたえてくもり日のうすひのたうけ霧たちわたる  
いかほ山谷間のきりは出湯わくけふりよりこそ立のほりけれ  
千ひろある谷はそことも見えわかつてきりのみ深き木曾の山おく

見 戀

君こふるころは野への花すきほのみし日よりみたれそめてき  
わたつみの千尋の底のふかみるの見るよりふかくなるおもひかな  
玉たれのをすのすき間のはつかにもみし人いかて戀しかるらむ

雪

おもふとちすいつかこみて木の芽にてかたる夜半しも初雪のふる  
年々につもるもあはれ庭の雪ともふり行わか身とおもへは

時 雨

をくら山をしかのつものつかの間にはれてはくもるむら時雨かな  
今よりの冬の夜さむを老か身にまつしるけふのはつまくれかな  
さらぬたに老はねられぬ冬の夜の夜寒の床にふるまくれかな



久かたの月もくもらてふり来るはかつらの露やうちしくらむ

牧童の書に

牛曳て行とは見ゆるわらはへもまゝろはうしにひかれたるらむ  
あふき

末ひろといふもことわり何事もひらくるみよにあふきと思へは

斯波正近か故郷なる名古屋へ移りすむとて出たつわかれの會に

まかね路の一日はかりと思へともわかればとほきこちこそすれ

田 氷

うふすなの森のこからしさを暮て里わの田るはこほりるにけり  
山家月

とひわたるわしの羽かせに雲消て月かけすこし木曾の山さと

朝 霜 十一月廿四日從三位公廿年祭の日徳川家五町御邸の兼題

いつのまにまものちきけむ朝月夜ふめはあとあるまへの棚はし  
移ろひしまかきのさくの花の色をまろさにかへすけさのはつ霜

あられ 同く當座

よひのまのまくれや窓にこほりけむけさふりくるは霞なりけり

左は神前に備へし歌なり 同II

君まきてはや廿年になりけりさのけふとも思ひしものを

六十七年のくれもことなくて過ぬるこそうれしけれ又孫ともも人となりて。玉は四つ

かつは三つにぞなりにける。

くたち行者はわすれてうま子らの生たつみるそうれしかりける

芥川〔明治二十九年集〕

都鄙迎年 兼註吟社後

都よりたつやことしのはつかせは臺灣までもふきわたるらむ

子日祝 黒田月次

君か代の千代のためしにひくものはけふの子日の小松なりけり

新年雪

こそよりもふれとことしのものにしてみればめつらしけさの白雪

新年梅

梅もかつほくそみにけり草木までうれしきとしのはしめなるらむ



わか門のやなきのいとのかき日をくりかへしつうくひすのこゑ  
うくひすのこゑのまらへは青柳のいとにこゑあるこゝちこそすれ  
悉のこゑを木のまに聞ゆなる引とめけりな青柳のいと  
青柳のいとふさむすふはるかせにうちとけてなくうくひすのこゑ  
悉は花のねくらにあきつらむやなきのいとにより来てぞなく  
木母寺にもものして

すみた川ちりにし梅のかをとめてくるふこてふや八のちもかけ  
尋てもあとはむなしきふる寺にはるやむかしの梅のかをれる  
ある人の賀に。春祝。

よしの山一目ちもとの花よりも君かよはひのかすやまさらむ  
餘 寒

年こえしこゝるゆるひに冬よりもさむさや春のならひなるらむ  
花有遅速 國光社月並

引つゞくさかりをみせてちそくとくさくこそ花のなきけなりけれ

雨後春月 三月廿二日大日氏

春雨のあと 川柳風見をて 梢に月を匂ひそめたる

未飽花

つほみよりさきてちる迄見つれともあかぬは花の日かすなりけり  
よしの山あかぬこゝろにさそはれて幾重わけきぬ花のまらくも

松間花 四月十九日邪光社大合

あらし山花咲ぬらし山松のこのまはかりにかゝるまらくも

馬上花 四月二十日宅の合

花陰に月毛のこまをあゆませておほろ夜さくら見る人やたれ  
かすむ夜の花の木かけをゆく時は駒の月毛もおほろなりけり

落花

あらしふく梢はなれて庭さくらさのふの花はけふの白雪  
龍虎の畫を見て

千里をもはせゆく虎は雲にのる龍におくれぬすかたなるらむ

庭新樹

朝なく庭めぐりして見るもよし日ことにまさる木々のみとりを  
うれしさもの 木全宗儀合五月十五日

とづくにゆきて年へしかなし子かかへりしとさのちやのこゝろよ

物まなひなりてわか子かとの國ゆかへりしときのおやのこゝろよ  
まぢくはつ時鳥聞る日のこゝろうれしさ何にたとへむ  
うれしきは初ほととぎすきし日に折よく友もとへるなりけり  
かきりなくうれしきものはうまれ子のをのこにてさへありしなりけり  
丸毛文六身まかりぬとぎして

かへりこぬ春の行へにさそはれていにし君こそかなしかりけれ  
有馬山いて湯の中にかたらひし君のおもかけ今もわすれす

茶

去年の葉を煮てつれくらくらすかなうちの木の芽のはるさめの空

残花何在

夏山に柴かるをのこまひはせむのこれる花のありかをしへよ

田家卯花

苗代の水のみとりに影見えてうの花まるし小山田のいほ

首夏水

川岸のやなきの青葉かけ見えて水のみとりも夏めきにけり  
ゆく水に若葉うつりて青淵のいろさへ夏になりけるかな

朝子規

山のはにのこるもうすき朝月夜ほのかになきてゆくほととぎす

船中時鳥 五月十五日升宗方

郭公ふな出まつまの一こそはのりおくれしも嬉しかりけり  
船どめてさく間たになく過にけり此川かみの山ほととぎす  
船とめてまほまつほととのやすらひにうれしくさし郭公かな  
夜船こく人もさけとやほととぎすよとのわたりにふけてなくらむ

水原氏のいもせふたりの賀に

ひとりたにかたしと思ふを妹とせの二人なからにまめしちよかな

五月二十八日。信濃國善光寺に行かむと思立ちて出たち。上野より汽車に乗りて。王子

赤羽を過れば。藤といふ所あり。車の中より見出して。

里の名のわらひははやく葉になりて野畑の麥も夏めきにけり

上尾桶川鴻巣を過て。吹上にかゝるほと。富士の山はるかに見えたり。

たゝなはる青垣山をふもとにて雲井に白く見ゆる富士の根

三十日。空はれたれば。朝とくれないの汽車にのりて出たる心地いとよし。けふは足立の

郡大宮にます氷川明神にまうて。公園をも見てむと思ひて大宮驛にてありて。十四五丁

の道をかちにてたとり。氷川の宮に至り。御前に伏拜かみぬ。此宮は官幣大社にて。武蔵國の一の宮とぞ聞えし。御垣のうちいとひろく。御前の方に池ありて。橋を渡せり。その池いとふりて水草生茂り。ひま／＼に鯉鮒などにやあらむ。ひれふり遊へるさま。いかにも所を得たりとみゆ。宮のの後へには神さひたる杉の大樹あまた生しけれり。そこをめぐりて公苑のかたに至れば。池の中島にひとつの亭あり。こなたの岸に小船を繫ぎ。繩一條をかけわたして。かの亭に行かふへくものまたり。又岸に沿て賤か家のあなるか床を並へて人まちかほなり。かなたに石の門立たるは。かねて聞つる藤の戸といへる家なり。軒端を蔽たるは其家に名たかき藤かつらにて。花の盛さこそと思ひやらる。かなたこなたに見ありきつ。再ひ池の前に回り来て。うちひとりまぢぬ。

ちきりあらは 又も来てみむ 池ちかく 咲らむ ぶちの花の さかりを

訪佐々木古信 六月廿四日

ほととさすともにさかむと 五月雨のはれ間に 君をたつね來にけり

梅雨霽 女鑑

山はみな青葉になりて さまたれの空もみとりにはれしけさ哉  
けふはまた雨間ならんと 人はいへとはるはうれし 五月雨の空

新竹

竹の子は軒より高くなりぬなり いつまでわか子をさなかるらむ  
皮ころもぬきし間もなく 此君は人のたけにも過にけるかな  
ことし生にはやも雀は宿りけり 竹もわかきはふしよかるらむ  
ほたるにも雪にもたよりよかるらむ せけらはしけれまとのわか竹

浦梅雨

さまたれのあめのうちこそもしほやくうらのけふりの霽間なりけれ

新 蟬

雨はれしみとりの空のはなやかに 聞え初たるせみのこゑかな  
めつらしく 五月雨晴しあしたよりきこえそめたるせみのこゑ哉

樹陰納涼

窓のもとにふみよみうみて ありたては庭のかへての陰のすししさ  
人もまた来てすしみけり 里川の岸のやなきの陰に來つれば  
夕／＼立よる庭の松かけの此すしさをと きはにもかな  
浪よするいそへの松の蔭に來て 夕すしみる竹まはの浦  
山ふかみ夏ともまらすまらかしの陰ゆくみちはすししかりけり  
夏山のいつこはあれと岩まみつわきてすしき松の下かけ

里川のさしの柳のかけとへはとく来てすゝむ人もありけり

後藤信明より文通せし中に。懐舊のこととも多くいひおこせける。返事に添て遣しける歌とも。

君は美濃われは都とへたつれとへたてぬものはあゝるなりけり  
折々に思ひいつるは垣一重へたてゝ住しむかしなりけり

こは前津の宅後藤とうち合せなりしゆゑなり

かなしくも八十ちをまたてちりにけむはゝそのかけやいかにさひしき  
明くれに千代もと母をいのりつるころを神は志らすやありけん

こは母か八十にちは賀を祝ひてんと思ひなりしにはやく身まかりけるといひおこせけるによれり

いせの海にむかし得さりし白たまはけふのひかりとなりけるかな

こは信明か三重縣にて用ひられさりしを岐阜縣によひて奉職せさせしより終には郡長にまてなりて特に六等官正七位に叙せられしによりてなり

悲しくもありつるなるのわさはひはかへりて今の幸となりなき

こは廿四年の震災に妻と子をうしなひけることを思ひて

あたなりしさくら山吹ちり過て後こそ藤は花ささにけれ

撫子露

たれか此朝夕露をちふさにてあふしたてけんなてしこの花

夏山

よき陰のあるたひとにいこひつゝ夏の山路はゆかれさりけり

夏松 六月二十二日大文樓にて伊藤氏會探題

ときはなる松もすゝしく見ゆるかなまみつのもとにそひてたてれば

夏琴

松風のかよふゆふへのことのねはすゝみかてらの志らへなるらむ  
かよふらむ松かせ清きたかとのにさくも涼き琴の音そする

夏鳥

わか楓枝さすかたにあさりして鶏もすゝしき陰もとめけり  
夕立のはれゆく空にかささきのいつこをさしてとひわたるらむ

夏龜

うき出て脊をほす龜もみゆるかな五月雨はれし池のみきはに

羽前國西置賜郡成田八雲菴夏井範允といふ人の亡父の十三年祭に。よみてよとこふにまかせて。夏夢。

はかなしや昔の人にあふとみしゆめもみしかきなつのよの空

夏夜雨

まと近き竹の末葉にはらくとふるちとすしよひのむらさめ  
やり水のかかりの火かけ打まめりわか葉のうへにむらさめそふる  
夕つかたはしるしたりしすのこまで吹いるよるの雨のすゞしさ

江刺恒久か七十の賀に

そのふなるきくをかさして仙人が経ぬらむ千世にあはむ君かな

七月廿一日よりふりつきたる雨に。川と水あふれて。ことに高須廓は海のことく成り

ぬとて。其いたましき有さまを歌によみつらねて。よし田としかつか許より。みせにお

こせけるに。そを見て涙せきあへず。

桑畑も一夜に海とかはる世のありとはおもひかけすやありけむ  
哀その水になかるゝ家を見てうきたる世とは思ひまけむ  
君かすむ里のあたりは海となりてこゝろにもあらぬうきめみるらむ  
水の上にいのちをつなく舟みればうき世はおもひはなれさりけり  
水いりてけふりたえにしかまとにはなみのよるひるかはつなくらむ

秋たちけるに 八月八日

この頃の南のかせもこの朝明西にかはりて秋は來にけり

清水港にて軍艦より大砲の試放を爲す

打はなつ筒おとたかくひくくなり大海原のなみもとゝろに  
大筒の音するかたをみさくれは沖つ波まに白けふりたつ  
なみの上にないはなちけむほつゝの音より先に白けふり立

清見紀行の中

人はまたこぬ見の濱のあさほらけひとりたちいて磯つたひせむ  
田子の浦に見し不二のねのことはや高き調へのかきりなるらむ  
藻屑のみかさあつめつる沙干瀉君かあさらは玉やひろはむ  
沖つ風西ふさわたる波の上になひきてすしあまのいさり火

寄岡祝

此秋は千斛のよねをくら岡にこめてよはひの數やつむらむ

月見ふがしてといふことを 植松氏月次會の題

吾妹子とふたりよりぬておはしまにふくるもあらす月をみじかな  
小夜ふけて野山まつけくなるときは月もこゝろやすみまさるらむ  
月かけは山のはちかくなりけりむかしかたりに夜やふけぬらむ  
まろかねの名にふ大路人たえてふけたる夜半の月そさやけき

とふ人をまつとはなしに月よししよしといひて夜をふかしつる  
あすもまた見むとおもへど更わたるこよひの月のをしくもあるかな  
引き雲をよひのあらしに拂はせて更行空の月そさやけき  
をしと思ふ心よりこそ月影はふけていよ／＼すみまざるらめ  
山のはにこよひはいるな更るまでなかむるころ月もまじりなは  
樹間月 同當座探題月つくし

中空に見し月かけもさよふけて木の間になりぬ夜やふけぬらむ  
松かへて庭はまけるにまかせつゝこの間／＼に月をみるかな  
立さはる庭の大松斧とりてむかはまほしき月のよ半かな  
湖上月

田上月

限りなく月かけはれてまら鳥のとは田の末も見ゆる夜半かな  
雲間月  
ともすれば影もちりくる心地してくも間もる夜の月のさやけさ

都月

大宮の光やそらにかよふらむみやこは月もすみまさりけり

秋霜

もみち葉のかつちる上におく霜のまろさをみれば秋たけにけり

山菊

かをらすはまらてや過む霧深き谷間にさけるまらさくの花  
たけかりのたよりにとひてみつるかな山下いほのまらさくの花

菊盛久

またそめぬころより咲てもみち葉のちるまでにほふまらさくの花

紅葉

にしきにもまさる紅葉のいろみれば人のまわさそかきり有ける  
染いつるちらすもおのか心とやもみち葉さらすまくれふるらむ

枯野狐

物すこきかれの、原の真夜中にもゆる火見えて狐なくなり

十一月二日。平田神社の例祭に。

千よかけてまかきのさくもかをるなりさかゆく家の風のまに／＼

ともし火



かゝけてもかひなきものはいたつらにわかよふけ行くよ半の燈火  
たどり行山ちの末のひとつやに見えてうれしきまとのともし火

行路箱 十二月十二日古川知屋家會

里人の跡をたどりてゆく野へはまもこそ道の志をりなりけれ  
のる駒をとめてかふへき草もなし朝霜ふかき小野の中みち

違約戀

いつかたに引たかへけむ小車のおとたにたえてせぬゆふへかな  
ひとことのかはりやすきも我からとみを志る雨にぬらす袖哉  
筑前國人の八十賀

ことしまつ八十瀬わたりて千年川君かわたらむ末そはるけき

残紅葉 瀧氏題

時過て今さら秋にかへる手のさかりを見るもめつらしきかな  
秋くれてのこる一木の紅葉はおくれてそめし梢なるらむ  
嵐ふく高ねは早くちりはてふもとはかりにのこるもみち葉

川水鳥

わか門の田川の水にゐるかもものたつおとすなりこほりすらしも

寒樹風

實のはやく落てさひしき柳の葉をなほのこさしとふくあらしかな  
冬かれて梢もさ木となりしよりあらしのおともさひしかりけり

冬夜夢

圍のうへにささゐるまもの氷る夜はこゝろとけたる夢もむすはす

冬 月 十一月二十一日瀧氏當座

木からの吹からしたる梢よりかけさへやせてみゆる月かな  
霜くもりする夜もあれと大かたは冬こそ月へさやけかりけれ

冬 庭 十二月一日植松

はらへともはらふ跡よりちりまきてあち葉ひまなき山てらの庭  
木の葉ちり松さへやせて石はかり目にたつ冬の庭のさひしさ  
うなる子かあそふ垣ねの日あたりにつむ草もなき冬かれの庭  
雪つもるまるとに文よむこゑさけはをしへの庭は冬かれもなし

谷 水 植松方の探題

なかれし谷をこほりにむすはれてけさは汲へき水なかりけり

爐 火 十二月一日花雨吟社

いつまでか世に埋もれてうつみ火のはてはむなしく灰となりなむ  
冬の日ふしを見て

きよみかたまくれてわたる雲間より雪こそ見ゆれふしの芝山  
あしからの山路まかれてゆく雲の上にさやけきふしの白ゆき  
不二のねにつもらさりせは雲の上にもふるまら雪をいかてまらまし

山家初雪

朝なくわか門かよふ柴人の道さへたえてふれる雪かな  
寒樹

寄書懷舊

夕からすねくらにまよふこゑさひし片山はやしも木々のみして  
かきさきし是そかたみとみるふみの上にはらくちるなみたかな

枯蘆

風寒み入江にたてる蘆の葉はかれてもかれぬおとのさやけさ

殘菊

うつろひし色もわかれすおく霜にそれかあらぬかまら菊の花

歳旦 余か齡七十になりぬ

くみあけしはつわか水に門松のちよのかけこそ移りそめけれ

新年鶏

庭つとりおのか名におふ年立てうれしき音をや今朝はたつらむ  
けさはしもあくるをまちていさましくうたふかどりのとしの初聲

松影映水

池水のかゝみにうつるかけみれば松のちよまでさやけかりけれ  
池水に千世をうつせる老松のかけものとけし波たゝぬ世は

墨繪の松に歌よみてと人のこひければ

のとかなるみよを心の松なれば吹らむかせのおともさこえす

新年鶯

君か世は冬ともいはす立かへるとしのはしめにうくひすのなく  
うくひすの年たつけふのひとこゑは百よろこひのはしめなりけり

水邊若菜 一月十五日伊藤信行會

小松ひくけふしも賤か小山田にはつねせりとてつむも珍らし  
里の子か澤田のくろの深根せりつむかと思れはかつあらひつゝ  
たつのゐる野澤の水に袖ひちて千世のためしのわかまつまはや  
野へはまた雪深しとやかとちかき澤田のねせり賤かつむらむ

外山雪 一月二十四日鈴木重永會

峯つゝさふるらむ雪をまからさのをやまの里に誰かみるらむ  
朝またき筒うちかたけ市谷のとやまの雪にゆくたか子そ  
朝日かけのほる外山の雪晴てふもと迄まをまはゆかりけれ  
きのふみしたかねの雪はまからさの外山までこそふりつゝさけれ  
たかさこの尾上やいくへつゝもるらむ外山もけふは雪ふりにけり

皇太后宮の神さりたまひし時

久かたの月のと山の岩戸たてかくれましけむ影をしそ思ふ

雨中鶯

梅かえにふる春雨をちもしろみぬれてもなくかうくひすの聲  
立いてゝさく人もなき春雨のゆふへまつかにうくひすのなく

蟲明の迫門 小石川松岡驛の依頼

なみの上にかすめる月の影おちて明こそわたれむしあけのせと

神博士の身うせけるをかなしひて 二月六日

代るへさのものならませは君かため老のいのちは惜からなくに

坂正臣を訪ふ。一昨日女子出産せりと取込中なれば。そこへして歸るにのそみ。筆

をかりて 五月十五日

さくら花ささのさかりに姫小松おひ出てたりとさくかうれしさ

四月十日馬角六十六にて身まかりけるよし聞て

あはれ君六十あまりの一ねふりさめていつこに花をみるらむ

浦賀のあたりにもしける時

田をまへに山をうしるのかけ造りすみても見まくほしき宿哉

静岡縣安倍郡大里村なる宮崎總五といへる人は。貴族院議員なるが。古稀賀に櫻と寄松

祝と二題の歌こひければ。

うま人につらなる君か家櫻うへこそいろもことに見えけれ  
世とともに盡せぬ松のこほれ葉も君かよはひのかすにまさらし

三河國渥美郡大崎村の高柳秀雄か父幸太夫兼許か還曆の賀に。寄柳祝。

あふくにも高さやなきの梢にはのとかにちよの風や吹らむ

養老松風 神谷五平より乞はれける

漣つせのみつはかりかは是も又老をやしなふ峯のまつかせ

螢 六月廿日浦氏當番、星ヶ岡茶寮にて

五月山やみの木かけを吹風のゆくへも見えてとふ螢哉  
岩はしる音きくのみも涼きに水さへ見えてとふほたるかな  
船あそひさそふ河邊に螢さへひかりを花とちらすよはかな  
川そひのならの下みちよるゆけはさむきまてこそ涼かりけれ  
くれぬれは涼くなりぬ蟬の羽の薄きもあつき夏の日なれと

夏 旅 七月四日川崎千虎家合兼題

わきもこかきせたるなつのたひ衣うすきはあつきころなりけり  
ふけぬれは涼かりけりぬきすてしよるの衣をひきかつくまで  
浪よする風をさよみか浦つたひ夏をはなれて行たひ路かな  
くさく

さらぬたにならの葉陰のすしきに一むら雨もふる夜なりけり  
かも川のすしみのともし影消て雨になりゆく夜半のまつけさ

夕立

あたこ山ゆふたつ雨の風先にふらぬみやこも涼かりけり

扇

風かよふまみつかもとの捨扇なつを忘れてたれ歸りけむ

夏 旅

こゝかしこ夏の旅路にいて、ゆく人は大かた湯あみなりけり  
まなひやも夏やすみにやなりぬらむ旅にゆく子のおほくも有かな

朝 蟬

朝いしていまた朝戸もあけぬまにはや鳴そめてせみの聲する  
朝日さす向ひの岡の松の葉のまけく聞ゆるせみのこゑかな  
朝露にぬれて音もなく空蟬の羽袖やいかにすししかるらむ  
けふも亦あつき日とこそまられけれ朝よりせみのこゑまざるなり

舟納涼 花雨吟社

夕月のかけもるかへるかつら川船は空こくこゝちこそすれ

吳秀三の洋行するに餞してよめる 八月八日

國の爲學ひのみらにゆく旅は八重の潮路も神を守らむ  
心ゆくわかれなりけりにしき着てかへり來む日をかねて思へは

君が行ちへの波路のをちまてもまたふ心はおくれやはする  
つゝかなく三とせをへて歸る日をまちみむまての命ともかな

湖邊夏月 諏訪氏の會集題

浪まぐらすしきゆめやむすふらむあさつまふねのなつのよの月

鎌倉より東京へ歸るとき。黒田氏のもとへはかきにかきて送る。八月廿四日

貝をのみ拾ふと思ひし海邊にて玉をも得たり君が言葉の  
めつらしくおくりし君が言の葉の花をかさして家つとにせむ

吉田周平といふ人を訪ひけるに。すき人にて庭のたて石木たちのさま。いとちもしろく

造りたりければ。歸りて後。いひやりける。

すむ人のこゝろの奥も見ゆるかな物さひにたる庭のけしきに  
何となき木立のさまも庭のいしもあるしからにやさひてみゆらむ

山みちに菊さけり 十月八日植松有經月並會集題

秋もやふかき山路の末見えてささみたれたり白きくのはな  
世をさけてひとり入にしみ山路によき友得たり白きくの花

閑庭菊

ともに見てめてましものを菊の花さきても人のとはぬ庵かな

湖上霧

大津いでし船のけふりも立そひて朝きりふかしにほの海つら  
あひさするあまもなみちやたとるらむちものゝはまのけさの朝霧  
玉くしげはこねの山は明たれとそことも見えずきりのたてれば  
さ、並や波まつかなる水海にきりはいよく立まさりけり  
さ、なみや浪の上にも立にけりまかの浦わの今朝の朝きり

朝水鳥

朝つく日かけさすかたの池水に霜うちとけてをしの眠れる

折紅葉

家つとに手をりてかへる初紅葉こや山つみの神のたまもの  
たかを山あかぬあまりの一枝は折もなさげの峯のもみち葉

御幸田の歌

みゆき田の稲葉の穂波うちよせて豊かなる代の秋かせそよく

ある人の男子まうけし祝に 諏訪氏のしとめ

よる光るたから何せむ世をてらす玉となるへきをのこ得たれば

江寒蘆

霜こぼる入江の蘆のまをればにちとさへかかれて浦風そふく  
夕 菊

花のいろはさたかならねと夕月のかけなつかしくにほふ菊かな  
入日さす影に匂ひて夕はえのいとまされるまらさくの花  
夕まりの遊も今やはてぬらむみる人つとふさくの花園  
花のうへに露見えそめて夕月のかけこそにほへ庭のまらさく  
夕月のかけにて見れば白きくにましるさきくもわかれさりけり  
秋かせのそゝる寒けき夕くれに霜かとまかふまらさくの花  
つくり花子らにもたせて夕まで菊みかへりの人を行かふ  
今志はしまれ人とめてともにみむともし火つけよさくの花その  
梅遠薫

さくうめの花のこゝろもうかるらむこのもと遠くかをる夜半かな  
またしうせし人の身まかりて。又のとしの春。梅の花さかりなるに。去年を志のひて。  
いとはやも咲にけるかな梅の花をりてまとしは誰におくらむ  
松上雪  
うつもれてあたゝかけなるさまみれば雪こそ松のふすまなりけれ

朝 霜

のる駒のいふさも白し武士のこてさし原の霜のあけほの  
はかなさは日かけまつまの朝顔におとらぬけさの霜のはつ花

田家歳暮

眞柴こり稻かり入れて小山田のさとにきはまきとしの暮かな

露をよめる

さゝかにのいとも玉を買てけり軒のまのふのけさの白露

箕作博士のおもひもかけすとみにうせられけるを。おとろきとふらひて。十一月三十日

よしや君其身は玉とくたけてものこる光の世をし照らさは  
消かへるこゝちこそすれなき人をおくりてかへる道志はの露

叙爵の宣下ありければ 同II

なき跡の苔のまたまで御めくみの露かゝらむと思ひきや君  
かきおきしふみの林のことの葉や千世も朽せぬかたみなるらむ

みつくり麒麟の送葬ありし夜ちて茂一のうまれければ 十二月六日

なき人をおくりて歸る其夜しもこゝにはちこそうまれ出にける  
かなしひも又よろこひもとりにあるやうき世のならひなるらむ

冬祝言

とよとしの雪をさかなにひしほりくむもたのしきみよの冬かな

冬 鳥 鮎久子會

ふる雪にふやたえぬらむ軒近くむれて雀のなくあしたかな  
あくて田のおち穂あさりて雀さへをとる小春の空ののとけさ  
あしる

あしるもるまつかつゝれの衣手の田上あろしいかにわふらむ

隅田川の冬月 十二月十五日

棹さして見る人もなし隅田川師走の月夜舟はあれとも  
みめぐりの鳥居の笠木霜見えて墨陀川へに月さえわたる  
くまとみし中洲のあしも冬かれて月かけひろきすたの大川  
すみた川中洲のあしも霜かれて水の上ひろく月そさえたる  
墨田川水にはこほり堤には霜かと思えてさゆる月かな  
行水のとはまなからすみた川こほりをまける冬のよの月  
白髭の森のこからしよるさえて月かけこほるすみたの川つら  
孫の七夜に名を茂一とつけて

生出し二葉の小松まけり合てさかえそゆかむちよの春まで

水 鳥 十二月十五日吉川氏會當座

降雪にあしまの床もうつもれてあないとほしのよはになくねや  
大川は氷りはてけむわか門の刈田の水に鴨をむれくる  
こほるらむほともまられて水鳥の羽ねするおもさむきよはかな  
もみち葉は流れ盡して立田川うかふいかもの青羽なりけり

冬 鶴 十二月十六日諏訪氏

朝ほらけ雪の花ちる櫻田に春おもほえてたつのなくなる  
ひとりぬる夜や寒からし曉の霜につまよふあしたつこのふ

惜歳暮

春をのみまらし昔もあるものを老てはとじのをしまるゝ哉

紅葉の折枝に 諏訪氏のもとめ

君にとて手折らさりせはもみち葉の赤き心を何に見せまし

冬くわいさう 毛利元徳公追悼會

君まさはかゝけてましを玉たれのをすのと山のけさのまら雪

今年はいぬのとしなれば元旦に

おのか名のとしをむかへて門松にたはるゝいぬのうれしかほなる  
としの始めに

とし立てくはる老をいかにせむこゝろ計りはわかかへれとも

新年雪

あらたまの年の初雪ふりにけりまとしも年はゆたかなるらむ  
ふるとしのちりも残らず白妙にふりあらためしけさの雪かな  
君かよのとしの初めに白銀の花をさかせて雪ふりにけり  
いさきよき御世のけしきをあらたまの年の始の雪に見るかな

一月五日。相摸の國。葉山なる。高崎ぬしのなり所を訪ひけるに。其家山により海にのそ  
みて。眺望いはんかたなく。誠にこゝろゆくすまひなり。

君かすむ垣内のものとみゆるかな青海原も富士の高根も

此あたりいとあたゝかにて。椿花と菜花と小瓶にさゝれたり。

のとかなる此すまひかな冬なから菜の花さきて椿匂へり

床にかけられたる軸は。香川大人の朝日に鶯の書讀にて。ことのはの匂ひは今さらいふ

はかりなく。そのかさなかされたる歌の。高からす低からす。又かたよらす。まことに中  
を得たる。やかて是まらへなりとあるしはいはるゝに感して。

かきりなき餘情なりけりうくひすの聲のまらへもさく心地して

かくてさま／＼うちかたらふついでに。宇井可道と問答のことなど。道のうへにつきて。  
いとねもころなるさとしをうけ玉はりて。こゝろに思ひつゝける。

道はわか心にあるをまらすしてくやく外にもとめつるかな  
たとらむもはるかなりけりさくたひに道はいよく遠くなりつゝ

一月五日。小坪の養神亭にやとりける。其夕つかた。高崎ぬしの葉山のなり所をとひて。

何くれと物かたらいけるに。その宿なる養神亭に。東久世伯の君の居玉へれば。あの  
れけふも訪らひきなとありければ。歸りていとうちつけなれと。高さも短さも敷島の道  
はへたてぬ道としきけは。とりあへず。かくなむ東久世の君に聞えたる。

小坪なるあしへをさよみ雲井よりたつもふり来て遊ふなるらむ  
久かたの雲井にたかき君か名を早くよりこそきゝわたりしか  
かすならぬ浦のもくつをかきつめて奉るなりかしこかれとも

東久世君よりかへし

相摸の海濱の波のさよければ友よふたつの聲きこゆなり



いせの海きよき渚にあらねともひろひし玉のことの葉をこれ  
又

あしたつの友よふこゑに驚きてなきさの鴨も飛たちぬなり

竹林雪 詞林一月雜題

賤か家の北おもてなるたかはやしつもれる雪のとくる日もなし  
常にみぬ山さへみえてふる雪にさとのたかむらをれふしにけり  
時とふ雀のこゑもさびけなりたけのはやしの雪の夕くれ

山 雪

きのふこそ紅葉ちりしか白雲のたつたの山に雪ふりにけり  
葉山に行く道すからあられふりければ

風なきに浦のまつ原はらくとおとしてふるはあられなりけり  
浦風に吹さそはれて松の葉のこまかにふるはあられなりけり

途上松原ひろくある所にて。ふと思ひつゝける春の歌。

はるくとかきりもまらぬ小松原末はかすみてうくひすのなく

黒田清綱翁をとひけるに。ちりふし武則清雄なと來るて。當座よむ時なりければ。則其  
題梅始開といふまことを。

をりよくも冬あたへけき宿とひてけさささいてし梅を見るかな

庭残雪

北庭に残れる雪もみゆるかなみなみおもては梅もにほへと  
しゆろの木に雪のふりかゝれるをみて

春立ておもしろの木にふりかゝる雪こそけさは花と見えけれ

雪中友來

めつらしき友のとひけり雪ふれば枯木に花の咲はかりかは

寄草祝 北十七の賀

子らまこの枝葉まけりてもよ草もよもちよもさかえまさをむ

寄絲懷舊

あはれ其君が手引の白絲はなかさかたみとなりけるかな

寄書懷舊

ふみ分けし人は空しくなりぬれと文の林にあとは残りり  
踏分し人こそあたになりけれかきおく文に跡はのこれと

寄山祝

ふしのねもいかて及はむなそへなき君かよはひを山にたとへは

雪中若菜

朝またきわかなたまむと出てこし道の空より雪はふりつゝ  
ひかしの友におくる

とひもせむとはれもせむと思へとも遠きさかひはせむかたもなし  
年々にむかしの友は先たちてのこれる君そゆかしかりける

朝霞 二月鶯蛙吟社

二見かた明行沖にみつ汐を引かくしたる春かすみかな

尋梅 二月八日花雨吟社

折よくも尋こしかな梅の花ほゝゑみてこそ我をまちけれ  
とひこしを梅もうれしと思ふらむほゝゑみてこそ我をまちけれ

先年國府村にて

こふの濱いそもとゆすりよる浪のあとをまくらに聞く夜なりけり

まとの梅

なつかしく學の窓にかをるなり文このむてふうめの初花

曙霞

をちかたのかすみのふくにほのくと松見えそめて夜は明にけり

初春雨

染あへぬ柳のこすゑ打なひきはる來にけらし雨けふるなり  
春あさみ雪けや空に残るらむふる雨さむし夕くれの窓  
春さぬとうきたつ人の心さへ打まめりたるけふの雨かな

野春駒 鶯蛙吟社

千里行ねかひもなく春ののにあそへるこまのうらやすけなる  
民草のまけるにつけて春の野の野かひのこまも數やそふらむ

雪消松緑

いなは山峯のまら雪消果て松もみとりに立かへりけり

霞中月

春のよのかすみのみをによとみつゝ月のみふねはゆくとしもなし

梅燕

蛙なく門田の月のおほろよにそこともまらす梅かかそする  
ふしみ山霞む梢に夕月のかけも匂ひて梅かをるなり  
梅の花ほつかなくもかをるかなこすゑもみえぬ臘月夜に  
吹となき夕の風にかをりくるうめか香清し花は見えねと

道とほみ人もみにこぬ山かけにかをれる梅はなつかしき哉  
影うすきおほる月夜にかをりくる梅かゝいかてさやけかるらむ  
水汲に船よりありてあまかやのかきねにかをるうめをみしかな  
空たきの香もけおされて梅つほの梅こそかをれをすの内まで  
ゆけとく猶行さきにかをるなりうめさきつく小むかひの里  
うめの花手まくらちかくかをるよはすき間のかせもにくからぬ哉

蝶戯花

咲花にたはるゝてふのいねふりいかにのとけき夢かみるらむ  
うらやましなにの思ひも菜の花にたはれて蝶のあそふ心は

終日見花

菅のねの長しとまでもおほえぬは花みてくらす一日なりけり

春

朝 三月廿日本全宗儀會當座題二十首詠

目のさめて嬉しきものはうくひすのこゑさく春のあしたなりけり

春 日

目には花耳に鶯春の日をみるときくにとにくらしつる哉

春 夕

大井川かすむ入江のはる風にさくら花ちる夕さひしも

春 夜

あらし山花の木かけにかりねしてはるの夜をしく明しつるかな

春 月

さく花の梢にかゝる月かけはさはるまゝにてさはらさりけり

さやかに花の梢をみるへきに春しも月のおほるなるらむ

春 思

よしの山かなたこなたにかけて思ふちもひや花の志をりならまし

春 衣

みよしの山わけころもはることにくその花のかけになれけむ

春 風

山川の岩まの氷ふきときてさしの柳にはるかせそふく

春 雨

花をまつたより嬉しきはる雨もちとのみさけは淋しかりけり

春 水

青柳のかけの移りて池水のみとり一しほ色まさりけり

春 雲

よしの山花に別れやをしむらむはなれかねたるみねの横雲

春 山

花みつゝおほえす深く入ぬらむかへるさとほしはるのみ山路

春 河

おりたちて釣する子らもみゆるかなあゆみさはしる春の川瀬に  
苗代に田川のなかれせきとめて水ひくみれば春たけにけり  
雪とけし春の澤水底すみてひれふるうをのかすも見えけり  
まつ男か馬のすそする里川の水あたゝかに春日さすなり  
みきはよりこほりとくらしいさら川朝日のかげに水けふりたつ  
み山よりなかるゝ花をせきとめて春の末くむ里川の水  
花ちゆし宇治の川上春たけてわかゆとふなり清きせことに

春 野

つはなぬき董つみつゝ春は唯野へこそ人のすみかなりけれ

春 岡

さくら花松のひまよりみゆるかなこれや双のをかへなるらむ

春 海

浦つたひ貝ひろふ子か呼かはすこゑさへかすむはるの海つら

春 道

むれて出る人こそ山をなしにけれ花さくころの都大路は

春 旅

そこかしこ花見かてらの旅衣かさなるものは日かすなりけり

春 別

をしといはゝ花やうらみむみよしのゝはるに旅たつ君か別を

春 祝

さくら田にちよもかはらすさく花のかくこそあらめみよのさかえは

旅 中 花

都いてゝ日ことにおほくなりけり花にうかるゝ旅の道つれ  
只ひとり山わけ野わけ行く旅のともゝ櫻の花にこそあれ  
隅田堤に花を見ありきて

見にいてぬ人こそなけれ花よりもうかれ心のさかりなるらむ

夕 落 花

四月十七日矢田氏當座

さらぬたにおほつかなきを夕月夜木かくれてちる山さくらかな  
入相のかねも聞えて夕月のかげさひしくもちる櫻かな

燕

故郷の花の盛りも過ぎぬらむつはめにあひぬ我旅にして  
なつかしく来てなく軒のつはめ哉こそふる屋を又尋ね来て  
海山もとしもへたてゝきつれとも軒端わすれぬつはくらめかな  
ことし又去年の燕かまらねともふる屋の軒を尋來にけり

夕苗代

鶯社吟社五月題

せき入し水やあふれて動くらむ苗代小田に夕日さらめく

昔 四月廿九日植松會當座探題

ひらけゆく御代にあひなからともすれは昔戀しくおもひけるかな  
大和ちに入りたちしよりをちここにみるとみるものみな昔なり

花不殘

ちりはてゝ花ものこらすなりにけり春の日かすも今はとおもふに

牡丹

まつしさもまはしわすれてふかみ草さかりみるまそ樂しかりけり

松

ものすきはせぬ庭なれとこと木よりうゑは松をそらへかりける

新樹

やり水もうつるあを葉もみとりにて夏あもしろき木かくれのやと  
うなの子か庭遊ひする學ひやのならの葉かしはまけりあひにけり  
花ちりし梢やいつかうへの山みゆる木こみなみとりなりけり

氷川の勝伯の歌に『手馴つる玉のを琴の緒をたゝむふりし調はさく人もなし。今一首  
は『浮雲のはれみはれすみ定めなきおほつかなしや行末のそら』と有けるをさして。

聞わけむ耳はなき身も玉ことのそのまらへこそゆかしかりけれ  
うきくもははれくもるとも天つ日のひかりは常にさやけかりけり

首夏水 龜久子會

影ひたすわか葉うこきてやり水の底にも見ゆる夏の朝風  
かけ見えてわか葉すゝしきやり水にこゝろもうつる夏は來にけり

山 松 六月四日諏訪忠元會

千世へぬる老木もあれと末の山すゑのたのみは小松なりけり

曉水鶏

小山田のあかつき月夜さやかにてそこともまらす水鶏なくなり  
雨ふる夜郭公鳴ゆかた

さみたれの雨のあしにはちくれしとふり出ても鳴ほととさすかな  
郭公啼

このころはまれにのみなく時鳥老の耳にはきくよしそなき  
五月雨晴

五月雨のあめもこゝろもち晴てうれしきけふのまとぬなるかな  
柴の戸にさすや夕日の影見えてはるゝもうれしさみたれの雨  
うみはてゝおちたるうめも見ゆる哉五月雨はれし庭のこけちに  
いふせくもふりし五月の雨やみてこゝろさへこそはれわたりけれ  
まき人の来る日と志りて五月雨のはれしこゝろのうさしかりけり

夏山家

夏子かふ時來にけらし里の子か山あひの畑に桑葉つむみゆ  
樹はまけり水はすゝしく山里のなつをもしろくなりける哉  
うの花のかきねかくれのわかいほにあなまらしくし夏のよの月  
いさこゝに夏はすこさむ山川のなかれもきよし松蔭もよし

かくれかのうの花かさにてりあひてあなまらしくし夏のよの月

樹陰蟬

白かしのわか葉露ちる朝かせに羽袖すゝしく蟬のなくなる  
神のますとしまか岡のたかき木に思ひあかりて蟬のなくらむ  
わか葉さすもりの梢になくせみのこゑさへまけくなれるころ哉  
童へかもち引かけてねらうともまらて木末に蟬の鳴くらむ  
童へか目にふれしとやひもすからはかくれてのみ蟬の鳴らむ  
はこね山谷のこすゑになくせみのこゑあしもとに聞へげるかな  
あたこ山杉のこすゑになくせみのこゑさへたかし谷にひききて

扇風

たきまめし香さへかをりてゆかしさもまさるあふきの風のすゝしさ

鳥燈

わきもことさをさす池の鳥めぐりほたるみるまで日はくれにけり

窓前燈

ふく風に吹けたれしまとの火にかはるほたるのかけのすゝしさ

夏居所 七月二十六日薄の會

すむ家をはまへにかりて魚もつり あみもしてくらす夏かな  
見 戀

をとめ子かはなちのかみを夕まくれほのみてしより思ひそめてき  
庭 菊

草にのみうもるゝ庭とおもひしを咲出にけりまらさくの花  
夕 蟲 十月二日家令

ふり過し一むらさめの夕つゆに打まめりたる蟲のこゑかな  
軍人ならしの原を駒なへてかへる夕にくつはむしなく  
夕されは露にさほひて蟲のねもいよくまけくなれる庭かな

野 鶉

さらぬたにむかしの秋の戀しきにうつら啼なりふかくさのさと  
かり人のいる野の末の秋きりにかくれもあへすうつら鳴くなり  
安産のもとに

もろともに時におくれて残る身はうれしき老の友とこそおもへ  
何事につけても友をおもふこそ老のさかひのならひなりけれ  
花にとひ月にとはれてもろともに行かひ見まくほしき君かな

湖 月 十月二日家令

近江の海おものゝはまにひくあみの目もはるくとすめる月かな  
尾花ちるまゝの入江の秋かせにさえこそまされ水うみの月  
いし山のむかしの秋もまのはれて水うみてらす月のさやけさ  
近江の海八十のみなとのくまゝもくまなくすめる秋のよの月  
近江の海さしくる沙は見えねともみちわたりたる月のかげかな  
沙ならぬあふみのうみの波の上にもちてもみゆる月のかげかな  
沙ならぬなみもたゝへて水海にみちわたりたる月のかげかな  
まほ津より月にのりてやいてつらむ夜ふねいさよふまかのからさき

雁 來 花雨吟社課題

いつよりも秋かせさむく身にまみてことしはやく雁を來にける

月前興 永田道俊

をすのうちのいと竹とに大そらの月おもしろくみゆる夜半かな

仙家菊 大田原家令

やま人のちよのすみかを來てみれば老せぬ菊の花さかりなり

夜落葉 調林

まれにちるこのはのおとも聞ゆるはかならす月のすむ夜なりけり  
夜あらしのおとに夢路もたえにけりちるもみち葉の惜きのみかは

月下散歩 十月二十二日六口兵衛

行かへり身にそふ影を友にして大路の月にあそふ夜半かな  
露わけて小野のはてまで來つるかな月にはとほき道なかりけり  
鳥さへうかれてそなくわれはかりあこかれいてし月夜とおもふに

山房看菊

あかたなにをれるもみえて山里のかきねはさくのさかりなりけり  
住人は誰とまらねと柴の門いりてあそ見れまらさくの花  
山里のまかきの菊のかいまみにあるしゆかしくなりにけるかな

洞 菊

水のうへに打なひきても咲にけり谷のいはねのまらさくの花

野時雨

大江山くもこそかゝれ旅人のいく野の道や今まくるらむ  
行先に見えて野守かひとつやもそまられすふる時雨かな

窓前竹

三〇

吳竹のなひくすかたを月かけのさなからまとにゑかきたるかな  
風によく雪に又よさくれ竹をあきふしまとの友とこそみれ  
竹馬の昔おもへは此きみに馴こし世も久しかりけり  
年ことにかすこそまされ窓の竹うれしきふしもかゝらましかは  
忘りのねふりも覺てふくかせのおといささよさまとのくれたけ  
わか窓の竹を見るにもこひしきは馬につくりしむかしなりけり  
なれも亦ふみや囁るむら雀學ひのまとの竹にやとりて  
いつのまに陰くらさまでなりぬらむ一もとうゑし窓のくれ竹  
夕あらし軒端の竹を吹なへに窓のうちまでちるさゝ葉かな  
くものいのかゝれるまとのくれ竹によはの落葉を今朝もみるかな  
うきふしも嬉しき節もよそにして世をやすくふる窓のくれ竹  
かみあき

うなひ子かふりわけかみのちひ先も世もなかくれと神にいのらむ

天長節に雨ふりければ

御恵にうるほひわたる民草のすかたをけふの雨にみるかな

白 菊 十一月五日矢田隣の家會



ひるは雪よるは月ともまかへとも香はかくれなし白菊のはな  
世をよそにすめる宿とてうき秋もまらぬまらさく花咲にけり  
新ゆきのいろに匂ひて翁てふ名は負ひけらしまらさくのはな

羽田野國興か死亡の時

朝ほらけみるく消て行月のをしき友にもわかれぬる哉

山寺紅葉

眞清水にまきみを洗ふ墨染の袖もこがるみねのもみち葉

朝霜

のる駒のいふさも白し武士のこてさし原の霜のあけほの

歳暮近 十二月六日加藤義清家合

けふはまつ煤をさめして祝ひけり今いくかありてもちひつきてむ  
酉のまちいつしか過ぎて淺草のとしの市場もちかつきにけり  
行年はをしむとすれととまらてまたぬくれこそ近つきにけれ

冬庭

ありまかぬほとたに人のとはさりし庭そこの葉に跡たえにけり  
もみち散り菊も過にし冬かれの庭は雪まつ外なかりけり

霜はしらたぬ日もなき此頃の庭ははきもとりあえぬかな

まも白さまかきかもとにひえ鳥のけさも来てなくこゑのさむけさ

山家

まつかなる心の奥をもとめすはみ山すまひもかひやなからむ  
山深み軒はをめくる白くものまらすいつこか都なるらむ  
眞柴かり炭やく里のをのこまてみやますまひはよしといふなり  
世の外と思ひ入にしみ山までもれぬはみよの恵みなりけり

冬山

老の波又いたつらにこゑぬへしことしも今は末のまつ山

冬祝言 十二月二十三日子爵太田原一清家合

賤か家にかりつむいねもあまりあるみよの冬こそゆたけかりけれ

亥の年のはじめに

不二のねを年とともにやこえつらむ一夜ふするの床のはつ夢

加藤安彦のもとへ

こそこのある。小田原にて君のかくれ家をとひて。鉢木の謠曲をきしける。其折の  
さわすれかたき折から。うきたからの歌おくり給ひたる。いとなつかしくて。

田家煙

打なひくけふりにまゐるし大みよの風にまたかふ民のこゝろは  
とよとしの民のかまとのにきはひも空にまられてたつけふりかな  
年々にかすそふ民のかまとよりたつけふりこそはてなかりけれ

新年梅

あら玉のとしたつやかてさくうめの心の春にはやなりぬらし

浦霞

志かすかに浦こくふねのほのくとみゆはかりなる薄かすみかな

一月十日。新橋より汽車にのり。鎌倉に着し。直に笹か谷に黒田翁を訪ふ。在宿。鋤柄清  
雄菊池武則衣上吾明等も同席にありて。當座に題を設けて。各出詠す。去年の一月も此

山莊にて。菊池に出あひ。又此としもかたみに面かはりせて。あひみしことを悦ひて。  
天の川つままつほしにあらねとも年を隔てゝあひみつるかな

養神亭

海近く山とほからすすみなして千世のなかめにとめるやとかな  
春秋のなかめにとめる松かけに千代をまめてもすめる宿かな  
老人のこゝろやしなふすみかには此うみへこそよなかりけれ  
相摸の海さよき濱邊に老の波よるもわすれてけふはくらしつ  
七十になりぬと黒田翁のいはれければ

いにしへも稀なる君のことのははな盛りなり老ぬと思ふな  
黒田翁の別莊よりのかへるさ。思ひのほか日くれてくらかりければ。

星月夜おほつがなくも鎌倉の山の下みちたとりけるかな  
事しけきひとのこゝろを養ふはたゝうみ山のなかめなりけり

平瀉落雁

金澤にいたりて八景を眺望す

あざりとる人はかへりて平瀉のゆふへさひしくおつるかりかね

乙船歸帆

ちつともの松原こしにみゆるかなまほかけつれてかへる友船

野島夕照

あさつ風すゝしくもあるか夕つく日さすや野島の磯のまつ原

瀬戸秋月

神のます瀬戸の宮の玉かきにひかりそへたる秋のよの月  
いにしへの光を今もあふく哉瀬戸の宮の秋夜の月

内川暮雪

白妙の雪のひかりに内川のみねはいつまでくれのこるらむ

洲先晴嵐

打よするなきさは波の花咲てすさきの松にあらしふくなり  
あそな原雲ふきはらふかせ見へて沖つすさきに波たちわたる

稱名晚鐘

いさりする沖のふねまでひくくらむ磯山てらのいりあひのかね

小泉夜雨

旅にして誰にかたらむ小泉のまつに雨さく夜半の淋しさ

題まらず

さかみの海田こしの浦に年こえて老の波よる身をなけくかな

新年旅

あら玉の年たつやかて立出てそゝろこゝろも行たひちかな

春の野のけしき

のとかなる春の夕日を脊をほして菊つむ子らもみゆる野へかな

海水浴

老らくの身をもこゝろもやしむはたゞ汐あみの外なかりけり  
都にはちりにましりて在し身のあなすかくしほあみをして

真宮内親王かくれさせ給へりとさく日しも。雨ふりて。いとむひしかりければ。

かさくらし雨はふりさぬ雲の上に大みおもひのはれぬ日なれば

みつからの年をかそふればおとろくに餘りあり

よそちにもたらて死なんとせし命けふまであるは神のたまもの  
つたなくて世になすことはあらねとも君を思はぬ日はなかりけり  
大君のさかゆる御世にあへること老てかひあるわか身なりけれ  
かひありと思ふもはかな老の身は人もすすさめぬ朽木なりけり  
朽木ともいはゝいはなむ七十にあまるよはひは得やすからめや  
金澤文庫の再興なりぬときいて

かなさはに絶て久き文くらもたては立ぬる世にこそありけれ

松上鶴 郷氏

巢こもれるひないかならむつるのすむ松の上こそゆかしかりけれ  
此やとの松の梢にきこゆなりきみか干とせの友つるのこゑ

雪中求若菜

ふりかゝる雪のみ袖にたまりつゝつみためかたき初わかな哉  
七くさの数は得かてのわかな籠に雪つみそへて歸る野へ哉  
鶴久子の訪ひ來ければ

雲井にもかよへはかよふつはさもてけふは澤へにあり來つる哉

春 雪 近藤芳介追悼

かへさにはばや跡もなしわかなつむ袖にかゝりしはるのあわ雪  
かつ消て此世に跡をとめぬやはるふる雪の心なるらむ  
靈まつるけふの手向の花とみむまはしなきえそはるのあわゆき  
黒田翁か七十になりてたまものうけられぬとさきて

うれしさもつゝみかぬらむ御惠の露をうけたる君かたもとに  
春風寒

家においてけふはよき日とちもひしもいつれは寒き春の風かな  
鶯のはしめて鳴をききて

咲いてし梅さへあるに鶯のはつねもけさは聞え初けり

山春月

誰ならんむかけ見えてほそとのよほろ月夜にかをるそらたき  
は、き木のありとも見えす霞むなりその原山のはるのよの月  
山のはを立はなれたるかひそなきかすみをいてぬはるのよの月

寄翠祝

なからへよ千世もたえせぬことの緒のなかきためしに君をひくまで  
かきりなき君にひかれて玉ことのまらへも千世の音をやたつらむ

雨中柳 四月七日川崎千虎會(此花園)

晴るゝ日はかせにみたるゝ青柳のいとまつかなる春雨の空  
ふるとなきゆふへの雨を青柳の枝よりあまる露にこそまれ  
朝曇りいつより雨になりぬらむ露こそあつれ青柳の絲  
春雨ははれむとすらし青柳の雫みたれて風立ぬなり

花の時雨をりくふりければ

花見にもゆかましものをあすか山きのふもけふも雨はふりつゝ

山中鳥

箱根山朝之しくれは聞なれぬ鳥のねすこし杉の木末に  
餘花

朝風にそよくわか葉のひまみれはいまた残れる花も匂へり  
その原

ありとのみさして見さりしその原もあらはるゝ世にあひにけるかな  
夏朝

みしか夜ははしむなからに明にけりいさこのまゝに朝すゝみせむ  
卯花 五月二十九日加藤義清會堂座

朝日さすかさねのうつきかつちりてとけゆく雪のこゝちこそすれ  
ほのゝと明行く庭は卯花の垣ねよりこそ見えわたりけれ

曉時鳥

曉のさねかつゝみのちとやみてもりの梢になくほととぎす  
有明の月よりほかに物もなしなきしやいつこ山ほととぎす  
月よりもさやけかりけり有明のそらに一こ糸なくほととぎす  
時鳥あかつきかたの一こ糸はいくその人の夢さますらむ  
老らくのあかつきかたのほととぎすさめたる目をもさましたるかな

時鳥まれになく音をあかつきのねさめ折よくきゝてけるかな  
ほととぎすまた宵の間の一こ糸はねぬに目さむるこゝちこそすれ

新樹

朝かせに吹かへされてかへる手のうら葉よりちる露も見えけり  
あさ露の光そへたるたまかしはにひかかみ葉のうるはしさかな  
夏くれはまける青葉にをくら山ひるもあかるき陰なかりけり  
おしなへてひとつみとりにまけりけりはるのさくらも秋の紅葉も  
尙齒會の時よめる

いたつらに老ぬとなにかなけさけむかかるともありけるものを  
けふはかりたのしきはなし朽にける老木もはなのさくこゝちして  
うれしくも世のなか人のかすにいりてけふのまとむにあひにけるかな  
老の身のいけるゑるしありなからへてけふのまとむにあへらく思へは

緑陰月

みつ枝さすわか葉のひまを吹分て風こそ月をほのめかしけれ  
夏木立まげれる庭も月かけのもるはかりなるひまはありけり

水鶏

法の師か夕つとめする山てらのあかるのもとに水鶏なくなり  
夏木たちまけるこの間に山澤の水かけ見えてくひな啼なり  
わか門の水田尋ねて夕月のかけさすかたにくひななくなり

庭夏月

夕すゝみぢりたつ庭の松かけはやかても月になりけるかな  
更行は庭のこけちに露みえてわかはもりくる月のすゝしさ  
夕まりのあそひはやかて柳かけ月になりゆく庭の涼しさ

船中時鳥

ほとゝきすこゑきゝなから夏川にこゝろものりてゆくをふね哉  
子規おひてまつまのひと聲はふな出とゝむるつなてなりけり

池蓮

あれはてゝ世をふるてらの古池にをしきは蓮のさかりなりけり  
年ふれとにこらて清き古池のこゝろの花やはちすなるらむ  
池水に蓮のうきはの浮なからうこくや魚の躍るなるらむ  
露なからたをれば枝に絲引て玉ぬきかゝる池のはちす葉  
池水にかをりもみちて花はちすひまこそなけれうさ葉たちはの

朝またさき入谷かへりに不忍の池の蓮の花もみしかかな  
池水に色香あまりて蓮の花ひらくるおともさよさあさ哉  
さらぬたに朝かせきよき池水に見るもすゝしさ花はちすかな  
池水の浮葉における露みればはちすは玉のうてななりけり  
魚すくふうなぬかさてやふれつらむ一ひらちれり池のはちすは

水邊納涼

隅田川すゝしき岸に船もあれとまつ堤よりかちありさせむ  
堀江川月さしのほる夕まほにつれて吹くる風のすゝしさ  
松蔭にたゝすみをれば糺川袖にすゝしき夕かせそふく

夕月

一葉ちる桐のこのまに見そめけり空も秋なる夕月のかけ  
あたこ山楨の下つゆ見え初てこのまもりくる夕月のかけ  
天の川くもの浪たつ夕くれに月のみふねはさしいてにけり  
天つ雁さをとなりてもとふ空に船かとみゆる夕月のかけ  
なかき夜をいかにせよとか山のはのくるゝもまた月はいつらむ  
立のほる霧よりうへにほの見えて夕月きよし宇治の川つら

礮山の蔭よりくれて沖つ浪よるになり行月のかけかな

夜漸長

寐さめして有明の月の影みれば夜もいとなくなりにけるかな  
枕つくつまやのもとに蟲なきて秋のよなかくやゝなりにけり

老の後月を見て

秋なから老のねさめにみる月はかけおほるなり目やかすむらむ

吳秀三かハイドルベルグの城山にのほりて四望すれば麓に長流ありて岐阜金華山の景

に似たり感慨かきりなしといひおこせければ

城山のふもとをめぐる長良川なかき年月君をのみこそ  
いなはねに似たりときけははいてるのその城山もなつかしきかな  
今かへりこんといひつる言の葉をいなはの山にかけてこそまて  
忘るなよいなはの山の峰におふるまつといひつる人のことのは  
をりくの文の便をつなてにてつなくは老のいのちなりけり  
ねかはくは歸らむ日までなからへてまち酒くみて君をいはしむ  
藤浪壁か獨逸のストラースブルグといふ所よりおくりける文をみて  
君すめは千里へたつるすとりすもたゝとなりなるこゝちこそすれ

草花

妹とわかふたりしてみる中垣にをとこをみなの花もにほへり  
一枝をりふた枝をりて秋の野のかへるさおもき花の家つと  
朝顔のあはれその花つるやせてあきさひにけりあはれその花  
秋の野の花にたはふれてふやわれわれやこてふと身をたどる哉

樵路猿

柴人のゆきゝもたえしみ山ちにゆふへさひしくましらなくなり

暮秋蟲

草むらにきこゑし庭のきりくすかへに鳴まで秋たけにけり  
よひくに鳴わたり行く蟲の音をきくも淋き秋のくれがな

東京の古川たつをぬし。今は臺中にわたりて。道の先達として月次のまとゐなとせらるゝ

よしきいて。

いやたかく高砂ままによはふらむわかひのものとあしたつこのこゑ

残紅葉 加藤重太合

もみちちる水に一むらなかれぬはうつる梢のかけにそありける  
くれぬとて何かは秋ををしみけむのこるもみちちもありけるものを

木からしのかせもまらてや過ぬらむ山ふところに残るもみち葉

夢 水原史郎の追憶會に

うきとを見るはうつゝとまゐるくもなほ夢とのみたとらるゝかな  
田舎わたりしける道にて

のとかなる小春の空の日あたりにおほねきりほす賤もありけり  
十一月一日佐々木尙信うせぬと聞て

何事もわれよりあとみし君はよみちにも又さきたちにけり  
去ての山峰のあさかせ身にまめてよもつひらさかけふやこゆらひ  
はかなくも移ろひにけり菊の花千とせの友と思ひしものを

池水鳥

日おもてにねふれるおしも見ゆるかな木かけは氷るおやの池水  
うるはしきすかたの池の水かゝみ見つゝ並ひてあそふをし鳥  
山かけの池の朝風身にまめてかもそなくなる夜は更ぬらし  
かれてたつ池のみきはの蘆の葉にまじる青葉は鴨にこそあれ

寄水鳥戀

をし鳥のつかひ並ひのいけ水にふかさちきりのほとそまらるゝ

三六六

夜初雪

めつらしくふるらむさまもゆかしさをあやめもわかぬよるのはつ雪

初雪

あしからの關の八重山いかならむ都もけふははつ雪そふる

海邊千鳥

品川を朝たち來れは竹芝の浦かせさむみ千鳥なくなり

冬朝

山かせのあさきよめする木かけにはあつめてたかむ紅葉たになし

夕落葉

いかはかりこよひこのはやつもるらむゆふへよりふくこからしの風  
上野山けふもくれぬと入相のかねにこたへてちる木のはかな  
ふきとふく風に木の葉のつきはてゝ松のふる葉のちるゆふへかな

笹

葎おひ入まつへくもなきやとを何にたましくあらねなるらむ

冬夜

十二月十二日大口氏納會

かさゝきの空にわたせるはまの上におく霜見えて夜はふけにけり

三六七



わきも子とふたり寐したにさむかりしふゆの夜いかてひとりあかさむ

雪中歳暮

道たえてふりつもれともくれてゆくとしは雪にもさはらさりはり  
道たえてくれゆくとしのとまりなは此ふる雪もうれしからまし  
道たえてふりつもりたる雪のうちにかてか年のくれてゆくらむ

山放題集〔明治三十三年集〕

新年眺望

あら玉のとしの初日はるく／＼とあふくみそらにたつ鳴わたる

雪中松

ふりつもる雪の下にもあらはれて見ゆるは松のみさをなりけり  
さらぬたにさむけにみゆるおいまつのかしらに白く雪のかゝれる  
ふる雪に埋もれてこそ中々に松のみとりは色まさりけれ

松上鶴

此はるはよことあらんと大庭のまつをやたつもまめてすむらむ

わか君のちよをほきつゝ大庭の松のうへたかくたつのすむらむ  
大庭の雲にそひゆる松のうへに鳴音もたかし天のたつむら  
大庭の松にすむたつ松よも君をはちよの友と見るらむ

なからへて七かへり目の子の年にあふはうれしきよはひなりけり

鶯入新年語

うくひすもとしのはしめをいはふとて百よろこひの聲やたつらむ

水村早苗

門の田に千束の苗をうゑなへて八つかたりほの秋やまつらむ

天城晴雪

けさみれはましろに成ぬ天城山きのふの雲やゆきけなりけむ

時谷梅林

ときかやの梅のさかりを来てみれは此さとはかりふれるまらゆき

内容紅葉

うへの山ちるもみち葉に旅人もにしきをかつく鳶のほそみち

曉港帆影

あけのうらみちのうらみちのうらみちのうらみちのうらみち

夜をこめて港こきいてし船の帆のほのみえそめて沖を明ゆく

瀬戸明月

かさしきの空にわたせるそれならて月すみわたる瀬戸の長はし

八幡社縁

夏木たちまけるわかはの朝かせになひけはみゆるあけの玉かさ

山鼻鶴松

山はなに年へて立るおい松はさなから鶴のすかたなりけり

寄梅祝

いろことに梅もゑまひやひらくらむ君か千年の春にあひつゝ

望夫石の歌

思ひあまり其身は石となりて世に名をとめけりあはれさよ姫

金婚式に 爲武井芳矩

老の波いそこすまでもかはらぬやうみよりふかさちきりなるらむ

寄山祝 同上

真木洞戸其山なみの山つゝさかさきりまられす君かよはひは

浪合懐古

立さわく世のあたなみの浪合にまつみし月のひかりをと思ふ

加藤安彦一月三十日身うせぬといひおこせけれは

踏なれしこと葉の道をまゐるへにてよみちもやすく君はこゆらむ  
おくれゐてあふくもかなし朝つくよきえて跡なききみかみかけを  
うせにさとまらせをさして老のみのなきちからをも落しけるかな  
大道寺直のもとめに應して

ことのはをみれば逢見るこゝちしてむかしの人のなつかしきかな

野若菜 加藤安彦追悼會

野へみれば若菜つむへくなりけり君かいますはいさといはましを

月といふ事を題にて 矢部典則のもとめによりて

物みなはうつりのみゆく世中にかけもかはらてすめる月かな

懐 舊

むかしてそなほこひしけれ花もみちいまもなかめはかはりなき世に

春 雪

ふるほとをよのか盛とよもふらむつもらてきゆる春のあわゆき

春風寒

家がありてけふはよき日と思ひしもいつれはさむきはるのかせかな  
折梅

をりつるは一枝なれともうめの花にほひは袖にあまらぬるかな  
雨中柳

いろあせて花はをるゝはる雨にみとりをまさる青柳のいと

またしうせし人の身まかりける又の年のほる。梅花さかりなるに。なき人をまのひて。

いとはやも咲にけるかなうめの花をりてことしは誰にあくらむ

さかみの國にものをける時。いとひろき野中にて。

はるくとかきりもえらぬ小松原末はかすみてうくひすの鳴

つはめ

軒近くなれて來なくやわかやとに巢立しこそつはめなるらむ

梅によする懷舊 三月十一日蒲田懷舊會

雪の内にかついろみする梅よりもささかけて世をさりし君哉

春月幽 同當座

はるのよのちほろ月夜のほのかにもこのりてにほふ君かおもかけ

かすかなるちほろ月夜を老か目のかすむとのみもおもひけるかな

朝 鶯

此日ぬる朝いの床にきこえてゆめのうちより鶯のなく

ことし故夏海翁の七めくりの忌に。其子幸造ぬしか落花浮水といふ題をもうけて。人々

に歌こはれけるに。ちのれ翁とともによし野に花見にものをける時のことなど思ひ

つれは。さのふけよのやうにおほえて。

面かけにうかふをみれば吉野川なかるゝ花もかたみなりけり

今井良綱といふ人の七十賀に寄櫻祝といふことを

山さくらゑまひひらくる花の色にさみか干とせもみゆるやとかな

櫻

はれわたるそらのみとりにえら雲のかゝるはみねのさくらなりけり

初春鶴

若菜つむ澤の春風猶さえてさむけに立てる鶴の毛ころも

向島春景

白ひけの松のけふりやうすくこきすみた川へのかすみなるらむ

なの花

里人かことしひらさしにひはりの野はたのすゝな花咲にけり

海邊春雨

ぬれつゝもゆくはたか子を清見かた雨うちかすむうらの松原  
下總の國大柵方真。去年七十八にて身まかりける。一周年祭に。寄松懐舊といふことぞ。  
千世までとちきり植けむ松かえもいまはむなしきかたみなりけり  
あはれ其そのよの小松千世までのかたみにみよとうゑすや有けむ

偶作

いくらともあたひはあらしあらし山花見てくらすはるのひととき  
物名かにはさくら

えられしと山のなかにはさくらめとたつねて風の吹さそひけり

吉田とし和七十賀

富の上にとみをかさねて齡さへたかすの里に千世やつむらむ  
家はとみ身は幸ありて齡さへたかすの里に千世やつむらむ

武井宗祐翁の金婚式に。寄海祝といふ題をまうけて。人々に歌よませられければ。遠き

西のうみより得たる貝の大きやかなるをあくりて。いはひのころぞ。

二見かたふたりならひて老の波よするかひある君かさちかな  
千世迄も二見の岩の二ならひいけるかひある君かさちかな

老の後花をみて

としことにことしはかりとおもひつゝいくはる花のさくを見つらむ  
菘

耳とめてさく人もなし山里の柴のかさねの菘のこゑ

五月十日東宮殿下の御慶事あらせらるゝを祝し奉る歌

今年よりちよをくらへて榮ゆらむ春のみやまの松の二本  
うこさなき御代の礎かためたる大御ちきりは萬代までに

採早苗 五月十二日松浦伯爵家の月並會に

里わには植はてぬらし片山のさを田の早苗けふはとるなり

首夏田園

かけてほす衣の白くみゆるかな夏きにけらし小山田のいぼ

夏のはしめつかた田端村に松見に行きて

うつきさく田はたの里の垣ね道まける植木の蔭のすゝしさ

寄梅祝 近藤虎五郎か父の賀に

梅かえの花のゑまひもひらくらむ君か千歳の春にあひつゝ

寄松祝

高砂の尾上の松も老にけりきみかよはひを何にくらへむ  
遊村夕立

にはかにも水かさ増して濁り來ぬ夕立すらし川上の里  
名所濱

朝夕のみちこぬさきと旅人の友よひつきの濱つたふなり  
暑中行路

あつき日に松の影ふひ繩手道かたよりてこそ人は行けれ  
中村某の金婚式祝賀に。寄鶴祝。深川の中村五郎三郎紹介

むつましくつはさならへてあしたつの千世よひかはす聲のゆたけさ  
あられ 花雨吟社

こぼるゝを米とやみらむ庭つ鳥かけかけ出て霞はむなり  
雁

松風のこゑや雲までかよふらん琴柱になりて雁のちちくる  
腰のいたみになやみて

日の本の神まもりたへ諸越のこしさへたゝすなりにける身を  
飛彈古川の里渡邊章か母の八十賀に

なからへよひたの匠の墨繩のなかきためしを君に引まで

海邊殘菊

霜ちかぬ南の海に來てみれば冬もさかりの白菊の花

江水鳥

大井川こぼる入江にゐるをしのとけてねぬ夜を吹あらしかな  
入船も出ふねもつとふほり江川かもものたちるそひまなかりける  
堀江川たちては歸る水とりの羽おとにふねのゆきしをそまゐる

曉 霜

あり明の月影ふみてゆく道にあとこそみゆれ霜やおくらむ

東福寺敬冲大和尚に

いさやそのさとの道の道はまらねとも柳は緑花は紅  
世中はかくこそありけれいつみても鳥はくろく鶯は白妙  
春既下隣

中垣のあなたはやく梅さきてはるのとなりそまつ心なき

雪知豊年

とよとしのまるしの雪にうつもれてうらおもまろき冬籠かな

ちまち田に五百重ふりしく白雪はとしある秋をみするなりけり

松經年

住よしの浦のあしたつことゝはむいく世になりぬ岸の姫松  
枝たれて杖つく庭の松みれば老はわか身にかさらさりけり

十二月十一日鶴久子歿 同十五日送葬深川淨心寺

久かたの天とふ鶴の雲かくれ行へも老らすなりし君はも

名所橋 十二月十二日松浦盛家令

わたし得ぬ神の昔をまとはにかけて久さくめの岩橋

野雪殘

みかり野にかくれもあへす立鳥のはつかにふれるけさの雪かな

雪中竹

起かへる力もけさは埋もれて雪になひけり庭のくれ竹

おもけには打なひけともふる雪にをれぬや竹のみさをなるらむ

歳暮祝

こむ春は天津雲井によきさかのみえてたのしきとしのくれかな

折々集〔明治三十四年集〕

さかみの國ゆかはらのいて湯にゆあみせんとして。一月一日の朝。東京の家を出たち。新橋にて村瀬徐重にいてあひ。二人打つれて汽車に乗りぬ。けふは空うちはれ。いとすららかにて。海をのぞめは。沖のかたはほのくゝとかすみわたれり。

あら玉の年立きぬと冬なから遠つ芝浦かすみ棚引

國府津にて汽車をおり。こゝより電氣鐵道の車にのりて。小田原へゆく。

小田原の山路や冬の外ならひあさみ花咲つゝし匂へり

かくて湯河原につきて。旅館中西か家にやとりて。月の光に二階よりみれば。北西は山高く立めくり。東南はうち開けて。藤木川といふ谷川。家の前を流る。其夜は目もあはて。

さらてたにねられぬものを旅枕まくらにひく山水のちと

小夜更てまくらに近し宵のまは物にまされし谷川の音

熊野神社は此里のうぶすな神なりといふ。小高き山の上にあり。いかきのとに樁の木ありて花さきたれと。下枝なるは手折れたり。

うれにのみつばさの花のみゆる哉下枝ははやく人にをられて

五日。よへより雨ふりいて。けふは。日ねもすやます。さよの夕つかた。

聞なれし谷のひくきは音かへて雨そ今宵は降いてにけり

けさ起出て

山みれば山は雲とち谷みれば谷はけふりて雨降しきる  
その夜

晴間なくふりくらしたる雨の日のよるまで絶ぬ玉水のちと

七日。小田原なる尾崎壯三より葉書おこせたり。歌あり『夜をさむみ寐ての朝けに出て  
みれば初雪ふれりあしからの山』かくあれと。こゝよりは雪も見えず。

あしからの山には雪やふりつらむまた霜もみす土肥の山ちく

あすは花雨吟社の歌の會始なりと思ひいて。兼題雪朝の歌よむ

けさはまた門もる犬の跡もなし雪まつかなる庵の志はの戸

八日。けふも亦。曇りはくもりたれと。雨はふらす。起いてみれば。箱根山のうたしき  
いと白くなりぬ。ちとろさて。

よへの雨や雪とふりけむ箱根山明け行く岑の白くみゆるは  
はこね山初雪白くふりぬなり都も今や夜寒なるらむ  
をりにふれてよめる歌とも

世をすてはこゝにを住まひ水清く山まつかなる湯河原の里  
すまは又すみうかるへし都より雲の八重たつとひのやまちく

十一日。おのれも今は歸らむとて。湯河原の小西か家をいて立けるに。道に千とせ川と  
いふなかれあり。

千とせ川はるかの跡にわたりきて今こそすくれまなつるか崎  
江の浦にて

ひかしみし花こそあらね江の浦の里はむかしにかはらさりけり  
寄梅祝 柳橋御子遊曆賀

若かへる春のかさしにさすや此おいかくるてふ梅の花かさ  
松上雪 一月二十五日松浦隆氏發會

ちつの崎みとりの松に白妙のきぬきせてけりけさの初雪  
浦千鳥

君かよをなかるの浦になく千とり千よに入千世と聲のきこゆる  
庭 松

梅やなきかへてもあれとかすかなるにはに松のふさはじきかな  
探若菜 二月十日松浦隆君か會に

かすか野の春なほさむき朝風にわかなくつむ子か袖かへるみゆ  
庭 鶯 二月八日花雨吟社の會に

めつらしくけさ鳴庭の鶯をちとろかしけり手まりつく子ら  
起出てかきをく庭の松かけに鳴音もさよさけさのうくひす

春 雪 二月十三日鶴久子道悼

きのふまでなきし鶯聲たえて春も身にまむけさの沫雪

窓前梅 三月十二日松浦伯爵家月並

文好む名もなつかしきこの花を學ひのまとの友とこそみれ

古戰場

粟津野の松のあらしは矢さけひの聲を今さくこちこそすれ  
すさまじきあらしのおとに矢さけひのむかしおほゆるくりからの山

五百川村の志藤氏の父の賀

かきりなき君か齡は五百川のそこのさゝれの數も及はし

若 草 花雨吟社三月題

もえ出る草葉をみれば春の雨のそめぬ緑も色まさりけり

酒

此さけはいつこの酒そつこのくにのなにはひさしなたの酒なり  
うさふしものめは忘るゝ竹柴の酒こそ人のたからなりけれ

三〇二

吳秀三よりみな方へ届きたる葉書四枚。みな子より見せにおこせたり。其中に歌あり。  
かへし。 三月廿五日

指をりて君かまつらむ其秋をわれもかそへて疾くところ思へ

新酒といふことを 去年の冬矢田饒の家會に

にほ鳥のかつしかわせの酒をかみてけふにひなめの神祭りせむ  
とよ年のにひ米まほりくみかはし酒ほかひするけふの樂しさ

名所鳥

わたつみの豊はた雲の末はれて入日に匂ふたまつま山  
都より道の千里はへたつれとまかさか島の名こそかくれぬ  
立かへり又も来てみむ雨ころもたみのゝしまはうらめつらしも

船中花 四月二十日定家卿靈前献詠

影うつる水ちもしろしあらし山けふの花見は船よりそせむ

春 山 四月八日花雨吟社會

學ひやの子とももけふはあすか山春のあそびにむれてきにけり

旅中看花 四月十日松浦伯爵家會

みるからに心はゆきて道はかのゆかぬははなの旅路なりけり



故郷をおもふ心もよそにして花にまたしむ春の旅哉  
閑居煙

たつとしもなきかくれかの夕けふりこころほそくやよそにみゆらむ  
春 夕

さひしさは秋ともいはし花ちりて小雨そほふる春の夕くれ  
寄玉祝 曾我長四郎金鱗式

かきりなき君のよはひの玉ならば五百つとひの眞玉白玉  
八代郡なる谷岡深より夕葉川 玖瀬川なりのわか鮎なりとて贈りおこせければ  
夕葉川早瀬の鮎もみやこまでのほれは登る世にこそありけれ  
春 田

ことの葉や生まけらまし春の田に人のこころのたねしまきなは  
苗代の水にまつりまつのをか田にたつ見れば春たけにけり  
春 川

うろくすの花うきするもみゆる哉さくらちりしく春の河水  
ちるを見てなれも心やみたるらむ花にましりててふの狂へる  
蝶 四月十一日佐々木信綱會

更 衣 花雨吟社五月題

夏來てもまた袖さむし花染のきぬを下着に白かさねせむ  
卯 花

山里はぬのさもいまたぬかなくにうの花垣は志らかさねせり  
青葉のみまけると思ふ山里に卯花白く咲いてにけり  
首夏風

花ちりてひなしき空に立にけり音も香もなき夏の朝風  
螢  
身をかへて音になく蟬もあるものをいつまでもゆる螢なるらむ  
籠外螢

をすのまをとほるほたるのすきかけは月のもるより涼しかりけり  
夏 朝

風そよく柳かもとの朝すゝみ夏は夕となに思ひけむ  
雲間時鳥

ひら雨の雲間の星のはつかにも鳴音めつらし山嶽とくさす  
待時鳥

まぢくて五月のやみも過にけり月にやなかむやま郭公  
渡時鳥

まくらかのさかのわたりの柳陰舟まぢをれはなくほととぎす  
雨中子規

つれくるとそく雨夜のほしか岡まれに來て啼ほととぎす哉  
梅雨久

夕月のくもりし宵をはしめにて有明までもさみたれのふる  
藤

わか宿の松にあまりて夏にさへ咲かゝりけり藤なみの花  
山

世の中をいとひもはてぬ身なれとも心は山によせてける哉  
山家經年

わか山に行てはかへる雲をのみ送りむかへていく世へぬらむ  
六十一の賀に

老らくの波もことしは若の浦に立歸りなく蘆たつの聲  
深山殘花 松浦登君の月並會

夏までも花はにほひて吉野山ありけるものを奥の谷間に  
三〇七

水郷雨

梅わか柳も見えずすみた川雨うちけふる水のみなかみ

郭公 荷田在満大人の百五十年祭に

そのかみをなれも老のひて時鳥けふはむかしのねにや鳴らむ

五月の末つかた。松の門みさ子のもとより。文のはしに。『けふはいかにあすはいかにと  
まつの戸をほととぎすさす音信もかな』といひおこせる。かへし。

けふあすと我をはまつの門ならはほととぎすさす音つれてまし

夏 月 六月二日黒田清綱翁月並

吹わくる若葉のひまにかけ見えて風と月とに夜半そすしき  
岩間もる音はかりたに涼しさを月もなかれにやとる夜半かな

河 螢 全八日花雨吟社會

立川にすたく螢の水かゝみよるはかりこそ影は見えけれ

水邊夏草 六月十日松浦登君

住よしの淺澤沼は水あせて草のみふかくなれる夏かな  
汀よりあせ行まゝに所得て池の中までまける夏艸

古郷夕 同上

さらぬたに物あはれなるふる里を夕くれにさへ来てみつる哉

雨後登 六月十九日諏訪忠元子

ふり過ぎし一むら雨の涼さを光に見せてとふほたるかな

井手今滋母の八十八の賀に。寄山祝。

百年の山もこゆへき君なれば八十ちの坂に足もなつます

夏夜惜月 京なる故宇田淵が一周年の追悼會に

なつの夜の更けて涼と思ふ間にをしくも月のまらみぬるかな

さやかなる光を人にをしまきて早くもまらむみしかよのつき

僧辨慶

たやすくも安宅の關は越にけり鳥の音ならぬ空をとをして

鶴拂霜

打はふく音あそさゆれあしたつの子をまほひ羽に霜やまくらむ

美濃人桑原合藏翁。夫婦ともに七十にあまる齡をもちて。いと健かなるのみならず。其

うみの子たちも。皆打そろひて。今年その息子博愛君。おやたちの賀の祝ひにものし給

ふよし。おのれ身はいやしくして。齡のみは同ほとなる翁なれば。つたなきをかへり見

す。祝の心をかくなむ。

小松さへ立さかゑけり相生にならふ二木の千代のかけには

庵夏月

卯花の垣ねかくれのわか庵にあなまらしくし夏夜の月

谷水

わか門のたにの小川の水さよみかほもあらひついでいひもかしきつ

にこりてもまた澄かへる谷水のさよさを人のこゝろともかな

とほくなり又ちかくなり谷水のおとをまゐるへにゆく山路かな

寄湖祝

あふみのやまほのみちひもなき海のたへて見ゆる君か千世かな

逆露

花に葉にちさなる露を其はすの糸もて玉にぬくよしもかな

夏花 七月八日花雨庵社

ゆかしきは夕貌棚の下かけに残るすゝみの床夏の花

いつれをか秋にちとれる花とみん庭のなてして垣のゆふ貌

四 麥 七月七日黒田露月並會

あはれわか老のひつまやの撫子の葉かくれてこそ花咲にけれ  
繩中雨

まかね路を走る車にねふりつゝふるとも雨をまらぬ旅かな

夏夜翫月 七月十日松浦詮君月並

身になれて涼しかりけりうすものゝさぬすきとほるなつのよの月

山家雲

心なきものとはいはし我山にゆふへは歸る峰のまら雲

夕立

小車のほろ吹きとはすち風につれて降くる夕たちの雨

繩中山

日數へて歸るたひちにふるさとの山のみゆるはうれしかりけり

江上舟

なにはかた入江に舟そつとふなる沖つ海はら浪立ちしも  
青柳のかけゆく人も見ゆるかな船はいり江の岸につなきて

松岡國男のもとめによりて

引とむる人はなけれとからことの浦にこゝろをよせてこそ見れ

月清み船こきくれはむし明のはままつかけにちとりなくなり  
閑居

ましはゆふかきねのものと山うとのうとくも世にはなりにけるかな

米岡斯近か遠曆の賀に。寄岡祝を。

この秋は千斛のよねを倉岡にこめて齡のかすやつむらむ

梅村宣雄か八十一にて身まかりけるをいたみて

あはれ君八十のみなともこき過ていつこ泊りと船はてぬらむ

曉 露 黒田清綱霜月次會九月題

さぬくのたかならはしに草葉まであかつき露はさき増るらむ

はんくわゐ

くろかねの門もやふりし手力のひゝきは今も世にきこえけり

池水鳥

いけ水の中島めぐりなく鴨の聲ひまもなし霜やおくらむ

をりにふれて

物思はぬ心のうちのかくれかは市にすめともまつけかりけり

梅村宣雄か病の床にふせりける頃。おのれは相模國三崎の海へにありてまららむらむ

か。八月の三日。身まかられるよし。東京に歸りて後きして。あつと歎くも。今はか  
ひなし。その病床にありて。今はの時まで。ぬしかよまれける歌の。筆の華第七十三集に  
載られたるを見るに付。ともくあはれにそゝる泪せきあへす。さきには加藤安彦江刺  
恒久佐々木古信などのぬしたち世をさられ。今又宣雄ぬしを失ふ。かく年毎に老の友の  
なくなるこそ。心ほをけれ。さて今ぬしの歌をうちすしつゝ思ひつゝける。

扇もつ手ちからもなくやみふし、君をは老らすとはて悔しも  
身のはてを思ひなやみてふせる夜に蟲の音こそ悲しかりけめ  
八十とせの永きもつひにみしか夜の一夜の夢となりけるかな  
とふ人をまちけむ時に訪はすしてなき跡をとふことのかなし  
朝貌は老ほみても猶のこりけりあはれはかなの人のいのちや

對月

たれよりもまたしかりけり宵にさしむかはるゝ月の光は  
われとわか心のやみに迷ふ身のむかふも月にはつかしき哉  
月よみの光をさよみさしむかふわか心さへすみわたりけり

岐阜日々新聞六千號の祝賀會に。菊盛久といふことを。

年ことにいろ香もそひて菊の花なほ幾秋か世に匂ふらむ

聞 蟲

まかへとも萩ふく風のひまことにきけはきこゆるむしの聲かな

霧

明石かた波のうき霧たゑくにはほの見えそむる沖のつり舟

夕 鹿 黒田翁の十月月次會

紅葉ちるをくらの山の夕月夜ほのかに鹿の聲を聞ゆる

和歌浦 同く

ことの葉の玉ひろはねと心にはかけて久しきわかうらなみ

ある人の一周年に。寄梅懷舊といふことを。近江國大津の某より懸晴

此はるゝいろかもいと、身に老みて君なき宿に匂ふ梅かな

初冬霜 美濃菅田社中のもとめによりて

夜もすからさやさし庭の小さく原おく露見えて冬はきにけり  
冬きぬと曉あらしさえくして小笹にみゆるけさの朝志も  
朝日さすかたよりさえて冬もまた淺さまらるゝけさの初志も

朝 霜

神葉にまてかけたりと見ゆるかなみ室の山のけさの朝しも

茶湯

たつる茶のこきとうすきの品はあれとちのつからなる道はたかはす  
竹栢園漫吟の内に「埋火の灰となりにし明かたにいさのこりたる友をかそへみる」とあ  
りけるに

衰にもよめる歌かな老て今いさのこりたるわれも其如  
重嶺ゆき恒久宣雄又さりて生残りたるともそすくなき  
友とちをちくりくいていつまでかいさのこるへさわか身なるらむ  
玉とみし人はあへなく碎けり瓦と思ふ身は残りつゝ

時 雨 十一月十一日佐々木信綱會

よさの海の浪に夕日はてりなからまぐれてわたる天のはし立  
冬來ぬと賤かかりほす小山田のいな葉ぬらしてふる時雨かな  
ふるほとをまはしさくけむと立よりし此松かけも時雨もるなり  
折にふれて

わか身さへをしまるゝ哉子うま子の築えむ世にもあはまほしさに

寄星祝

君か代はかきりもはてもなき空にみちたる星の數も知られす

吳秀三のつゝかなく歸朝しける時 十月十七日

へたてこし月日の數をかそふれば哀四年にはや成にけり  
あるかひもなき老の身と思ひしを

君を思ふ心はあめに貫きて千重の波路もさはらさりけり  
四とせまでへたてし君を待つてけふ逢みるも命なりけり  
とつ國に行たらはして歸りこし君をまち酒くみていはむ  
三とせたに長きに又も一とせをかさねて君かけふはかへれる  
月のいる西をなかめてこひし君朝日のことくけふみつるかも  
君にあひてなにの語らむこともなし只わか後をたのむのみなり

寒蘆風 十二月十日松浦發伯

すみた川川は、廣くみゆるまで中洲のあしはかれふしにげり

小 春 十二月七日高輪にて瀧園社中忘年會

かれる田の落穂たつねて雀さへをとる小春の空の長閑さ

紅葉殘枝

立並ふ松や嵐をへたてけむ片枝のこれる山のみち葉

竹不改色

君か代とともに榮えて吳竹のそのふのいろはかはらさりけり

劍 伊奈波神社奉納の歌

日のもとの光か、やく劍こそ國を守りのたからなりけれ

海邊雪

いつこよりのせて來つらむ松浦かた諸越ふねにつもる白雪  
なにはかた船こきいて、見るもよしあしの枯葉につもる白雪

竹 雪

けさはまたちきもかへらて寝たるかな雪にふしたる庭の吳竹

霰をよめる 上杉義順の月並

こき出るふなまたとさむき朝かせにほてうちたく玉あられかな  
みかりせしなすの志の原いにしへのあともまとるにふるあられかな

古 寺

大和路をめぐりてみれば見る毎にむかしかはらぬ寺なかりけり

窓前竹

竹馬のむかしおもへは此君になれこし世にも久しかりけり

雀

なれも又ふみや囀るむら雀まなひの窓の竹に來てなく

愛 酒 十二月十日松浦伯爵月並納會

花のかげ雪のまとも此ものたまさるなさけのあらはこそあらめ

氷 十二月十一日佐々木信綱會

さゝかにの絲ひくはかり見ゆるかなたらひの水のけさのうすらひ  
こぼりける岩ねのまみつ袖ひちてむすひし夏はきのふともふに

おしひのまゝ〔明治三十五年集〕

新年梅 御題

梓弓春よりさきにたつ年をいかにまりてか梅の咲らむ

寄松祝 山階宮八十の御賀

高砂のまつは老たりかきりなき君かよはひをなにくらへむ  
十かへりの花さく春をいくかへりまつにちきりて君は見るらむ

鶯有慶音 近衛忠輝公八十八の賀 號翠山

うくひすのもよさへつりをくりかへすこそまにもまらさきみか千世かな

けふにあひてうれしかるらむ鶯のこゝろはこゑにまられぬるかな

寄海祝 御題

蒼海原もろこしかけて八汐路のすゑまでやすききみかみよかな  
あを海原もろこしかけて打よする浪も花さくきみか御世かな

朝 鶴 川崎千成の月並に

横くもの空に聞えてほのくくとあけわたりゆくあしたつこのゑ

澤 鶴

ともなひしつまは澤邊にあさるらむひとり洲先にたつのたちたる  
友まちて立る一羽のあしたつはいつ大空につはさのすらむ  
山松の梢にひなを残りおきてひとり澤へにあさるあしたつ

春 雨 二月十六日天田鏡か月並合無題

水ぬるむすみた川原の夕東風にかすみなかれてはるさめそふる  
あつま屋のまやのあまりのあまりにもかすむとちもへは春雨そふる  
かさならすことのもらへもうちまめり軒端まつかに春さめそふる

都立春

君か代の花の都に春たちてまつ櫻田やかすみ初らむ

山縣大將の君に短冊をこふとてよみておくりける

ことくにもさりとまたかへて日本の國のはしらといます君はも  
たくひなき功を國にたてし君あふかさらめやまたはさらめや

二月十一日。起元節の日に。小田原なる尾崎壯三より。『名くはしき小岑のやまのうめ咲

きぬとく来てみませちり過ぬまに』といひおくりける。かへし。

小峰山花のたよりのことのははうめか香よりもかくはしきかな  
一日たにあたけき日のあるまは小岑の山の梅も見ましを

初春霞

玉敷の都の空にたつ春のひかりや四方にかすみそむらむ

朝若菜

野へみればけふは七日か里の子か朝またきよりわかたつむなり

二月のはしめつかた。高崎翁のうま子の生てほともなくうせにしようして。

いかばかり悲しかるらむうせし兒のうふこゑ今も耳に残りて

岐阜縣席田郡の人神谷某の父の追遠會に。雲といふことを。

きえてなき人をおもへはうき雲のゆくへを見るもかなしかりけり

旅日記の中の歌



いつまかと夜は明ぬらし玉くしけふた見の浦にうくひすのなく  
あらし山はなのたよりを聞しより家もわすれてわれはさにけり  
われに似る人もあらしの山さくらさくとさくよりくるふこゝろは  
霞中花 四月十三日建仁寺那光社

野雲雀 おなしとさ當座

遠なくと空にこゑして住よしのとほさとをのにひはりなくなり  
春の野にあかるはあつるならひともまらてひはりの空になくならむ  
すみれ咲野をなつかしみわかればひはりはそらにたかくなくなり

武井にあひて 四月

わかぬ浦になさし昔のたつかねもさくこゝちするけふの空かな  
杉立る谷のこのまにかつみえて咲みたれたり山さくらはな

和歌の浦玉津島の祠より海上を望む

わかぬ浦見えこそわたれ紀三井寺御堂の前の松のかけより  
永き日もやしくれかたになりてけりさはかり遠き山路なりけむ

紀の川の橋いとなかくりけれ

紀の川にわたせる橋のなかき日にいくたひ人のゆきかへるらむ

高野山にて

高野山見ればなつかしちこさくらむかしかたりにおもひよそへて  
めつらしくわかばかくれにきこゆあり老ぬとおもひし鶯の聲  
うくひすのこゑも聞えてさくらさくみやまめくりの面白き哉  
山ふかみ猶こゑたえず聞ゆなり春もあくる谷のうくひす  
ちりのこる花のこのまに鶯も古巢わすれて音をやなくらむ

大師廟

よの塵のけかれをさけて大師はもから山ふかくかくれましけむ

燈籠臺

とこしへに世をてらすらむこもまくら高野の山の法のともし火

女人禁制も今はなし

大御代とともにひらけて高野山みねまで匂ふをみなへしかな  
高野山のほる谷まの水のほとにこゝろのちりをまつ洗ひけり

久度山に眞田幸村の墳墓を見る

来て見れば花の老ら雪ひらくと苔のうへえろくちりかゝりつゝ

あくる日は朝どく紀の川をわたる  
うらくとはれたる春のあさもよし紀の川上はすこしかすみて  
なつかしきいもせの山も遠からぬきの川かみをわたりぬるかな  
新 竹  
やゝあつくことしもなりぬ立よらむ陰にはやなれ庭のくれ竹  
行路花  
すみた川ゆく／＼花を見るときは長さつゝみもみしかありけり  
日枝の社に  
まはゆくも見えまそわたればの／＼とさしいつる日枝の山さくら花  
山もとにつなける駒も見ゆる哉ぬしはいつこに花を見るらむ  
谷 鶯  
山の上に花見てをれば星か岡谷にさこゆるうくひすの聲  
おもまろし目には高ねの山さくら耳には谷のうくひすの聲  
咲花のたかきにうつれ谷陰にさかむはをしき鶯のこゑ

雨後花

春雨のはれてあらしのたゝぬまにいさ庭さくら露なからみむ

盛 花

さくらはなあかぬあまりに盛りのみ見るものかはと人やいひけむ

月前花 邦光社

久かたの月にさはらぬ白雲は遠山のはの櫻なりけり  
東山はるの夜櫻きてみれば月も木末にいてまぢけり  
白妙に匂へる花とにほふ月いつれ今宵の光なるらむ  
春田實忠の靈前會に。春の田といふことを。

春 雨

苗代の水口まつり賤のをかたぬまくみれば春たけにけり

夢

みるほともなくてさめぬるはるの夜のゆめはかりなるよにこそありけれ  
つゝし  
くれなるに小川の水もくゝるまでさきてうつれるはにつゝしるな  
暮春落花  
いまよりは何に心をなくさめむ花さへちりて春のくれぬる

くれて行く春のわかれもかなしきをいかにせよとて花のちるらむ  
行春をまたふ力もなくなりぬかたみと見へきはなのちれは

暮 春

大の川花ちりかゝるぬせきにもとまらてはるはくれていぬめり  
人ならば引とめましをめに見えぬはるのわかれをせむかたもなき  
松の上に藤の花さく

ふちの花さける山路はうくひすのこゑさへ夏にかゝりけるかな

五月雨霽

けふはまた雨間ならむと人はいへと晴るゝはうれしさみたれの空

祇 王

もえいつるもかるゝも同じ草なりとみしやさとりのはしめなりけむ

大嘗會

年もよし世も安くして神なめのけふのまつりにあふかたのしさ

庭新樹

庭ひろみまけるわかはのおほければみとりのほかの陰なかりけり  
まけりあふわか葉をくらき木の間より見えてすゝしき庭のともし火

未聞郭公

子規なくへき背よあかつきよとはかりいひて日ころへにけり

雨中若竹

うらわかみひとむら雨の露をさへおもけになひく園のわか竹

若 竹

ことし生のいさゝむら竹いさゝかもまたうきふしをまらしと思ふ

竹風如雨 六月十九日諏訪忠元子家會兼題

くれ竹のよ半のあらしの音さけは雨にさら／＼かはらさりけり

都子規

おほきみもきこしめすかに郭公まつ都にや初音なくらむ  
いつしかと都も花の春過てさくら田あたりなくほととぎす

岡郭公

すゝしさにあなし所を引かへりならしの岡に月をみるかな  
をりにふれたる

うきいて、脊をほす龜もみゆるかなさみたれ晴し池の汀に

岡夏月

あつき日もくれて岡への夕月夜さすかにかけはすしかりけり  
みたらしの川ちとすし片岡の青葉の上に月ものほりて  
小島庄助に贈る

いへのかせ又吹おこせ知多の浦になにかしありと人のいふまで  
夕立

日はすてに入はてぬらむ夕立の雲のたえまに星のかけ見ゆ  
夏山

夏山の木末青葉となりしよりこけのみとりもいろまさりけり  
谷水も清し青葉のかせもよし山路は夏そゆくへかりける

雨後蟬 七月六日黒田清綱家令

夕立の晴行あとは鳴蟬のこゑの時雨となりける哉  
隔遠路戀

心たにへたてさりせは行かよふ道遠くとも何かいとはむ  
浦登

鹽貝にまされる玉は見えねともひかるは浦のほたるなりけり

晩夏登 七月十日松浦澄月並命

夏もはや末野の原の草かくれ力なけにもとふ登かな  
夕立雲

ふもとには今やふるらむ我山の峰よりおこる夕立のくも  
鹿見島縣始良郡蒲生村天満宮奉納の歌。 田村野添操といふ人にいはれて

千とせへて神の恵の天にみつ光いよく世を照すらむ  
つくしかたちよへて今も天にみつ神の光やよをてらすらむ

寄道懷舊 九月二日入田知紀大人の三十年忌日に手向の歌

昔こそ戀しかりけれくたち行道の姿を見るにつけても  
えるへせし君か昔を敷島の道のうへよりまたふけふ哉  
折にふれたる

はなれやに笠たさらせてたひとり庭見てをれば松風そふく

田家月 九月七日黒田清月次

とよ年のいなは波より千町田に光もみちてすめる月哉  
秋の田のかりほの庵はあれにけり月と露とのもるにまかせて  
獨りたつかしの外の影もなし山田のはらのあきのよの月

伊達正宗

はるかなる西にひらけし國ありとはやくも君そきよてさくりし

寄瀧祝 九月十六日芝浦大野館親月會兼黒田翁歌集梓成祝賀會にて

此宿の名にふ瀧の白絲のなかくと君をいはふけふ哉

海邊月

和田の原夕沙よする波の上に影もうき來るもちのよの月  
いさこゝに此夜明さむ浪にてる月面白し竹芝の浦  
わたの原月影きよみよる波の花とも秋のみゆるよは哉  
かきりなき大海原の波の上に行へもまらぬ月をみるかな

山月

とひわたるわしの羽風に雲消て月かけすし木曾の山奥

月前雁

あひにあひてさやけくも有か雁かねの聞ゆる空に月もいてたり  
はるくと聲を帆に上て月の船とわたる空にかりそ鳴なる

初紅葉

はつまほのこの新室のうすもみちそめはいかなるにしきなるらむ  
かつそめしこのみそのふの初もみちけふをまちたる梢なるらむ

もみちの陰に人々酒のむ

この本にひさこかたけてうま酒をみわ山紅葉色に出にけり

川霧 九月廿五日晴窓雄月並會

宇治川の早瀬に馴し柴船もまはしたゆたふけさの朝霧  
朝ほらけいさよふ波の音はまて宇治のあしろ木霧たち渡る  
あしろ木にいさよふ波は霧こめて行へもまらぬ宇治の柴船  
よしの川いほす波ははやけれとうかへるさりは流れさりけり

行路霧

いかにせむゆくさきたとるみやま路に霧さへたちて日はくれにけり  
てる月のかけなる駒にのりてゆく道さへまよふ野への秋きり

月夜に舟こくかた

海原にあみ引ふねも見ゆるかな月にのりてやあきいてつらむ  
桂川月にまかせてこく船はあけ行空やとまらざるらむ

露

ちれはあききゆれはあきて置かはる露はかなき物としもなし  
あきわたすよもの草木のうへみれは露こそ秋のなみたなりけれ

月前鹿

庵にもる月の光のさひしきに鹿の音をさへそへてさく哉

蟲聲滋 諏訪忠元子家合

小笹原あかつき露のまけければみたれてもなく蟲の聲かな  
聲たえず蟲をなくなる秋夜のまけき思ひやなれも悲しき  
淺ちふにみたる、秋の露みればまけきは蟲のこゑはかりかは

千鳥

住よしのひかしの岸の友千とり松のよはひをちよとなくなり  
月くらきいそ山陰の汐くもりはれぬ思ひに千鳥なくなり  
かち枕ねさめてきけは濱千鳥友よふこゑも遠きよはかな

田家秋 十月廿五日 瑞忠雄合

秋まつり近つさぬらしわさ田かりにひ酒まほる小山田のさと

暮秋月 筆の花十月題

よもすから秋の除波ををしむとてあり明まで月を見しかな  
あり明の月のひかりのはつかにも秋の日数はなりにけるかな

神 十一月十一日 佐々木信綱合

天地をつらぬく人の誠こそやかても神のこゝろなりけれ

冬 竹 十一月廿五日 瑞忠雄月次合

うなる子かそのふの竹を竹馬にきりて春まつ年の暮哉

初冬蟲 筆の花十一月の題

今更になく音もあはれ暮秋暮ぬとはまらすやあるらむ

落葉浮水

風さそふ池のかゝみのみち葉はちりかゝりてそてりまさりける  
そめつくす紅葉は池にちりまきて水の秋こそさかりなりけれ

朝千鳥 十一月廿八日 松の門みさ子納合

横はまを朝ひらさする黒船の烟の末にたつ千鳥哉  
なには瀉朝みつ汐にさわかれて立ぬひまなく千鳥啼なり

松上霜 十二月十三日 黒田翁忘年合

月は入り日はまたいてぬ岡への松の葉老ろくおける朝霜  
夜もすからはらひしたつの聲やみて朝霜老ろし岡への松

雪中早梅

ふりつもる雪をはらへは袖の上に香さへちりくる梅のはつはな

梅の花雪にのみかは年にさへかくれて春の香をもらしけり  
龜と鶴と

よろつ世のかめの齡にくらふれば千年はいまた和歌の浦鶴

神 樂 十二月十日

みかくらの聲すみわたる大庭につもる雪さへおもまろの夜や

關 杉

立よりてむかしとは、や不破の山關のまろしの杉たてるかと  
何となく心そとまるあふ坂のせきの杉むらすきかてにして

曉 霜

鷹かりにくる人ならてくるす野のあかつき霜はふむ人もなし

あられ

みそのふの内にふりまるときにこそ玉のあられといふへかりけれ

氷

けさ見ればたきつ山川こぼりぬて水もいはまに冬こもりせり  
山川の水のこゝろのとけやらてむすほゝるゝやこぼりなるらむ  
起いて、庭のいさらぬむすはすゝむすふもまらしけさのうすらひ

三三三

夜を寒みいはまの水の下とちてとゝこふるおそ氷なりけれ  
落たきつ瀧の白糸こぼるらむかけてうこかぬ水のまらぬの

歳暮雪

道たえてふりつもれともくれてゆくとしは雪にもさはらさりけり

歳暮市

まめかさり松よ竹よとうる市のさわかしき間にとしそくれゆく

大原女

おはら女かつま木にそへし花のをに心のいろも見えてなつかし

除夜言志

年くれぬ今こむ春にわか命あすもやあらは逢むとすらむ

除夜待友

あすたゝむ春よりも先こよひこむ友待つけて年忘せむ

是にそへておくりける

老の身のありやなしやを人とは、冬籠りして門させりてへ

冬 朝

かゝみさへ氷にむすふこゝちせりさむきはけさのあらしのみかは

新年天象

けふといへは空にもとしやかへるらむいつる朝日のかげのとかなる  
二見かたのぼる初日にあたらしきとしの光をまつあふくかな

新年天

うくたから千々の初荷をつみ入て神戸のみなと年立にけり

新年祝世

あらたまのこともみよはやすかれといはふそけふのことはしめなる

龜延年友

萬代もすむへき宿の池水にあそへる龜や君かともなる  
龍の宮に行かふ龜を友とせは脊にのりてこそ萬世も經め

新年海 御題

わたの原白ゆふ花を手むけにてけさ年浪や立かへるらむ  
かきりなき千代のそこひをあら玉の年の始めのうみに見る哉

一月二日の午後熊谷直彦のもとを訪ひて試筆をともにしてよめる

かさそむる筆のいのちけなからへてことしも安くともに遊はむ

黒田老翁のもとへ

百年もよはひはかりはともにへむ君に似るへき我ならねとも

竹下康之か父八十母七十の賀を祝ひて。その歌こひければ。

父は八十母は七そち相生の松のさかえは此やとにあり

山 一月十一日佐々木信綱會

たひらなる御代にもあるかなあし引の山の奥まで道はひらけて  
萬世もかけすくつれす動なき山こそ御世の姿なりけれ

觀 雪 一月八日花雨吟社會

ひさし野の草のかれ生に駒とめてつくは高根の雪をみるかな  
すとふふをたきてからすの窓こしに雪みるけふの朝こちよさ

吉田利和より文のはしに。『うすつくや月の兎のかみ餅七たひをさへ重ねける哉』と

書付たり。其かへしとはなくて。口すさひける。

七十ちの老のかけみるかみもちつきの兎の年をむかへて

新年朝 熊谷直典の月並一月筆題



わか水にまつ手あらひて口そよきのほる初日をあふくけさかな

新年雲 一月廿日松浦隆君月次初會

ふりつもる園生の雪に新さと志の光もみゆるけさかな

爐火似春

埋火のあたりのとけみ釜の湯のたさる音さへ春こちせり

夕雪

君志のふ思ひもかくやつもるらむ此夕くれの雪のふかさよ  
さやかにも見えこそわたれ夕日さす藤城山のみねの白雪  
君志のふ涙もこぼる夕くれに雪も窓よりこぼれきにけり  
入相のかねの音さえて折からの哀もふかくつもる雪哉

早春柳 松浦家迷園といふ

みそのふの蓬はいまたもえねとも池へのやなき淺みとりせり

春旅

ゆくところ行所みなさくらにてたひは春こそたのしかりけれ  
花見ひとよしのをさして行旅は道の日数の惜くもあるかな  
雨風のさはりに旅の日数へて都のはなにくれけるかな

會の日病によりて得まからさりければ

梅笑ひ柳はまゆをひらけともまた出やらす谷のうくひす

隣 梅 三月八日水原慶夫會

手折らむはかたきとなり梅の花香はかりをこそ袖にうつさめ  
またねとも隣のうめの花盛り門たかへして人もこそとへ

依梅待人

かくれかの梅ささしよりこぬ人をまつころにもなりにけるかな  
宿の梅さかりになりぬとふ人はまぢもまたすも花にまかせむ

山家翁

世の中にとほきも嬉しうくひすの初音まつさくみやまへのさと  
山さとははるのひかりのおそけれとはつねははやき谷の鶯

庵春雨 松の門月並三月の會

いささらは友まつとの庵とひて春の雨夜を語り明さむ

浦春月

もしほやくけふりの末にかすみけり須磨の浦わの春のよのつき

牡丹

たくひなき色にもとめり深見草花のいのちの永きのみかは

歸雁

皆人の旅こゝろつく春の日に我もとかりや思ひたつらむ

人の家を訪ひけるに。奥まりたる庭に。白くみゆるを。なにそと問ひければ。椿の花と答へければ。

朝露のひかりそへたる白玉は間垣に咲けるつはきなりけり

藍川花

八十翁神谷簡齋祝賀會

よろつ世のかけをうかへて藍見河なかれに匂ふ山さくら花

平忠度

熊谷直典の家の會に

さゝ並やむかしなからのことのはの花はちよまて匂ひぬる哉

海邊春

邦光社四月十九日の會

櫻貝ひろふ少女も見ゆる哉波の花さくはるのうみへに

岩代國安達郡梨澤村の森清か家の古松を。鶴栖の松と名つけて。そかうたこひければ。

あしたつもすをくふ見れば此やとの松をやちよの友とみるらむ  
あしたつのすをくふといふ此宿の松の千年は君やまらむ

毎日新聞壹萬號發行の祝賀會に。歌よみてよと。大橋文之にははれて。

いやさかえゆくや日毎にとる筆のかすも萬の障りなくして

春眠

よみさしの書を面わにさしおほひ一ねふりまつ春雨の空

春雨

城忠雄の月並

まつかなる春の雨夜の物かたり更てはそれも打まめりけり

玉水の音を聞つゝねふる夜の雨のとななる窓の内かな

さらぬたに長き春日をつれくとけふも日くらしはる雨のふる

玉たれのちとを聞つゝねふる日の夢のとななるはるの雨かな

古渡雨

わたし守はやさしくたせ隅田川水上くらく雨こほれさぬ

坂正臣のもとへ文のついでに

見せはやと思ひし梅もちりにけり何につけてか君をまたまし

かへし正臣言の葉の花しにほへはちりし梅もさのみをしとはおもはざりけり

遠山氏夫婦の賀に。山といふ題を。夫七十七婦七十醫者なりとぞ

いやたかきよはひくらへて妹脊山ともに八千世の春や經なまし

春風

玉銚の大路吹わたるはる風にたつちりもなきけふの長閑さ  
いつこまでふきわたるらむ梅にふれ柳にすかるはるのあさかせ  
梅かをり柳なひきてはる風のふくにうこかぬものなかりけり

舟中看花 四月五日黒田翁會

岸にさく花はつな手にあらねとも引れてよらぬ船なかりけり  
水邊竹

池水の玉藻の上に打なひきみとりあらそふ岸のむら竹  
四月四日上野花見にゆきて

なからへてことしも花をみつる哉うれしき物は命なりけり  
不忍の池のほとりにて

かけみえて汀のさくら咲にけりいけのこゝろも動きそむらむ  
水上花 熊谷直興月次會

船うけて川邊の花の陰ゆけは雲にさをさす心地こそすれ  
夜花

月夜よし夜よしさくらもよしの山こよひは花のかけにあかさむ  
四月十一日朝。庭前にて櫻のちりそめたるを見て。

いつをかは盛といはむかた枝より咲けはかつちる山さくらはな  
雨ふる日 四月十一日

木の芽にてくらすにはよき日なれとも花にはつらさけふの雨かな  
はる雨にあせ行色を見せしとてちるや櫻のなさけなるらむ

すへて此西片町は。いつこの家も櫻なきはなくて。花時には阿部邸内は雲の中のことし。  
わか家より見るは。田口榊などの家々の花にて。榊のはことに見事なり。四月十一日正

午より雨ふりいて。少し風もあり花の命いと危くそ見えける。  
暮春落花

ゆくはるのをしさにそひて櫻花ちるわかれさへつらさけふかな  
歌といふ雑誌の發行になれるを見て。思ひつゝける。

ことの葉の道のまて草薙はらひ誠の花をさかせてしかな  
敷島の道のおくかを尋ねなは我真心のほかやなからむ

黒田清綱翁へ文のはしにかきつけておくりける  
さくにつけちるにつけても花ゆゑに思ひこそやれ君かあたりを

思へとも心に身をはまかせねはとはてそ過し花の盛も  
首夏

首夏

めつらしくわかほかくれにきこゆなり老ぬとちもひしうくひすのこゑ  
老ぬれとわかほかくれにきこゆなり老ぬとちもひしうくひすのこゑ

首夏月

白妙のうの花かきのゆふ月夜うつるかけさへ夏めきにけり  
ならかしのわか葉もりくる月影やまつすしさのはしめなるらむ

堀切の花あやめ見にゆきて

立かへり見まほりさりの花あやめけふはこゝにて日をやくらさむ  
葵

玉たれにかけしもあれとあふひ草みやひはけふのかさしなりけり  
ことくさの及はぬものは神山のけふのみあれにあふひなりけり

庭新樹

庭の面はまけるわかほかはのかけそひてみとりの外のいろなかりけり  
庭の面の青葉のひまにかつ見えてかしの赤芽もめつらしきかな

鶯

花になくこゑはかりかは鶯のわか葉かくれのとゑもめつらし  
ちりのこる花の木の間にも鶯も古巢わすれてねをや鳴らむ

渡郭公

すみた川舟まをれば水上をまつなきわたるほととぎすかな

時鳥

ほととぎす又聲もせずなりにけり初音さしはさのふと思ふに

深夜郭公

さらぬたにぬるまもなつのみしか夜をふかしてもなくほととぎすかな  
月はいり夜はまた明ぬ真夜中の空をさやかになくほととぎす  
郭公たし一聲にふくる夜のものさひしさもわすられにけり

關郭公

せきのとを鳥のそらねにあらねとも夜ふかくなきて行郭公

海 葛忠雄か月次に

すなとりしめかり鹽やき何くれとひろきは海の幸にこそあれ

新樹露 五月十二日松の門みさ子

水枝さす庭のかへての若葉より緑きたるけさの朝露

待郭公 五月十日熊谷直興家會

藤の花ちりにし日よりほととぎすまつに心そかへりそめぬる

ある人の賀の歌 伏しま賀にこはれて

悠の百さへつりの聲かりてわれもうたはむ君か千とせを  
たかさこの松の千とせもことふりぬ何によそへて君をいはむ

首 夏

花ちりし後は青葉の水かゝみ移り變りて夏になりぬる

雨 景 六月題

梅わか柳も見えす隅田川雨打けふる水のみなかみ

社頭松 熊谷直興會

梅をのみ何かはいはむ色かへぬ北野のみやの松の村立

雨中時鳥

時鳥なく一こゑのさやけさは雨くらき夜の物としもなし

源頼政

うもれ木となかめ捨てむことのはの花は今こそ世にかをりけれ

寄梅祝 細鍼之座が父七母六十一の兩人の賀に

梅かえも相生なれやよろつ世のいろを比へてにほふこの宿

尾張はまぬし

今も世に吹つたへたり百とせの翁かまひの袖の追かせ

水 鶏

ちもろろき水鶏の聲にはかられてふみまといけり小田のあせみち

小山田のこなたかなたに水鶏なくこゑふみ分けてたとるあせ道

窓の戸もさしてぬる夜の月かけになにをくひなの打たくくらむ

月さよき池のつゝみにいすたてゝ涼みしをれば水鶏なくなり

遠夕立 熊谷直安

さぬあらふなかれ濁りて里川の水のみなかみゆふたちそふる

池上蓮 七月松浦詮君課題

あれはてゝとしふる寺の古池にをしきは蓮のさかりなりけり

蓮の花ひらくるころはとく起て池めぐりせぬ朝なかりけり

夕納涼

ゆあみしてはまぬしをれば夏衣ひも夕くれのかせのすゝしさ

樹陰納涼 七月浦岡家

日盛りの道行なやみ松蔭に一ねふりする夢のすゝしさ

寄弓懸

ますらをかあら木のまゆみそりたかみさも切にくき人のさゝろか  
わか中は手なれの真弓つかの間も引はなれてはあられさりけり

月夜逐涼 宮中御月次題六月

風さよきはまの真砂路行かへり月の霜ふむ夜半の涼しさ

登山 七月八日花雨吟社

高しとて見てやまめやは不二のねも登れはのほる道は有けり

九月。八田知紀大人に贈位宣下ありけるに。高崎正風八田六郎兩人主となりて。諸家の

詠吟を乞はれける。題月似古。

人もあらず秋もそのよの秋ならず月はかりこそむかしなりけれ

閑庭菊 熊谷直興か月次九月課題

千世の香をかさゝは老もかくれなむ我かくれかの白さくの花

先つとし。松島に物しける折。つほの石ふみを見て。

石の上にふみとゝめすは濱千とり千世へし跡を何に見てまし

日光の山にのほりし時。くゑこんの瀧にて。

あなあはれ瀧の白絲いかさまにちもひみたれて身をまつめけむ

秋山

谷間にはをしか妻よひ高峯には紅葉にほへりあはれ秋山

月前船 十月十八日諏訪忠元の月並

沖さけてこきゆく船のはるかなる帆影も月にみゆる夜半哉

月前萩

さやかなる月ゆゑたにも寐ぬよはをこゝろしてふけ萩のうは風

夜聞鹿

みねこえてつまとひすらし春日山かすかにまかのこゑそきこゆる

月欲入

つくくといりかたちかき月を見て山のはとほくゆくこゝろかな

月前霧

なか／＼にけしきとなりぬかつら川月にさはらぬ浪のうき霧

天長節

大君のあれまし、日と學舎のうなひも千世をうたふけふかな  
あれまし、けふの生日をいく千度くりかへしてか君をいはしむ

故平田篤胤大人の六十年祭。日比谷神宮奉齋會本院にて催されし時。道といふ題にて。  
くしの道佛の道もふみわけて誠のみちを神にもとめむ

玉ほこの道はかた／＼わかれてもまことは神の道にこそあれ  
一すちにわかまこゝろを盡しなは神の道にもかなふへらなり

燈 菊忠雄の月並

たえ／＼に賤かわらうつちとのしてともし火くらし谷の一つ家  
まなふらむ人の心のおくまでもみえてゆかしき窓のともしひ  
消やらて残る光もあはれなり老のねさめのまとのともし火

松の門みさ子のもとより。』……』なといひおこしけるかへしとはなくて。

近からはとひもとはれもまてましを道こそ老のへたてなりけれ  
おいの後まはしとはねは松のかと千よもへたてしこゝちこそすれ  
君かその心にうえてみる花は菊も紅葉もあよはさるらむ

深見忠順廿年祭追悼歌 十一月十七日

はたとせの昔の秋のむら時雨又めぐり来て袖ぬらすらむ

殘 菊 十一月廿五日菊忠雄會

老ら菊も霜には色そかはりぬる紅葉はかりと何思ひけむ  
おく霜の後も匂ひて一とせの花のとちめを見するさくかな  
色かはるそのふのさくの花みれば霜の後こそ盛りなりけれ

神無月紅葉のみかは白菊の色をもそめて霜のふるらむ

辭 世

なにあともなすあとなくていたつらにくちはてにけりはつかしの身や

翁は此殘菊の歌を此世のなこりにて十一月廿九日にみまかりたまひ  
しなり病にふして歌よみやめたまひしはつかに三日はかりにてあ  
りしそはかなさかきりなりける  
あはれなり此まら菊をうつし世のはての形みとなしていにけむ

長 詠

賀歌一首并短歌

かけまくも綾にかしこし。高みくらあまつ日嗣と。天のまたまらしめしける。皇祖の神のみこと。遠つ世に軍のきみと。かしこくもさためたまひて。たふとくもよさし給へる。源のおほまへつ君。つかの木はいやつきく。物部の八十伴雄を。いさなひてつかへたまへり。とものをもふた心なく。おやの名をおひしまにく。海ゆかはみつつかはね。山ゆかり草むすかはね。おほきみのみたてとなりて。おのもく祖の名たす。常しへにつかへむものと。かたりつきいひつかひけり。うへしおそ水穂のくには。いにしへよいまのうつくに。齒さすてる日のとく。つかえ來にけれ。

反歌 すめらわか國はうこまかしかきや現つみ神のまらすかさりは

讚尾張國作詠並短歌

掛まくもあやにかしこき。あきつ神わか天皇の。敷ませる八志まの中に。國はしも澤にあれとも。眞菅吉尾張國は。皇神のいつくしき國。山川のよろしき國と。語繼いひつきけらし。そこをしもおむかしみかも。あつまつる御祖のかみの。眞玉なす愛子の君に。天地と彌とほなかに。此國を治めたまへと。かしこくもよさしたまへは。三栗の國の三中の。むしふすま名古やの里

に。眞木柱ふとしき立。高とのを高まりまして。登りたち國看しせれば。日經の國つさかひは。山祇の神さひまして。たくなつく青垣山に。朝さらす雲居たなひき。ふもとには民の家むら。天さらひけふり立こめ。日緯の國つさかひは。海若のうみをたへて。まを鏡清さなさは。夕羽振浪打よせ。沖邊には蟹の釣船。木葉なすつらくにうけり。脊友濃國つ境は。あさもよし岐蘇の大川。おちたさち多藝知流れて。百細竹美濃の山の。山のみゆいせの海まで。はろくになかれめぐらふ。早き瀬に眞木の嬌手を。百不足いかたに作り。玉藻なすうかへなかせれ。此かはの絶ることなく。海山の八十の河々。くまもあちすみしあきらめて。撫玉ひをさめ玉へは。萬代に彌ますく。開花のゑまひさかえて。十五夜月のおもたりゆかむ。はしけやしうましみにそ。尾張のくには。

反歌 尾張のや國つ御神のうら安くさかゆる時にあらくよしも

かくまもやさかへむくと豫しめ遠つ神祖をらしめしけむ

楠公をたへてよめる

高みくら天つ日嗣と。食國ををさめましける。すめろきの神のみことの。いかなりし世のまかことぞ。うちひさす都をよきて。いてましのいつこはあれと。雲ふかき笠置の山に。うつゆふのこもらひませは。あし原の水穂の國は。とこよゆくやみとしなりて。ちはやふる人のことと。さはへなすさわける時に。橘の朝臣の君は。かけまくもあやにかしこき。おほきみのみこ



とかふり。大丈夫の心ふり起し。家わすれ身もたなまらす。むらさきの心をくたさ。千よろつのおたをことむけ。天の下はらひきよめて。日の光ふたひてらす。御世にまもかへし定めし。御功は今も昔も。よくをへてたくひあらめや。そこをしもあなにともしみ。ものゝふの鏡とあふき。ますらをのりとたへて。あめつちといやとほなかに。かたふつきいひつきゆかむ。君か御名はも。

反歌 湊川流るゝ水はよとむともかしこき御名の絶ゆる世あらめや

唐詩選てふ文にのせたる詩の心を

天さかるひなの長路に。吾こふる千重のひとへも。なくさるるかたもやあると。ひむかしの岡のあたりゆ。夕くれにわか立見れば。秋の風雲井にみちて。もみち葉のほへる山に。あからひく日もかくろへは。あけまきの小牛追たて。おのかしゝ家路に向ひ。獵人の小鷹手にすふ。馬なへて歸るもあれと。老る人したえてあらねは。いはむすへせむすへまらに。たもとほり唯獨して。負征矢のそよとなるまで。なけきつるかも。

庚午冬十月間楓涯梅村景興悲慟作歌並反歌

靈冠春有知のさとに。人はまもさはなる中に。うまこりの綾に乏しき。はしけやし梅村吾兄は玉あへはあひぬるものと。月に日にあひうるはしみ。ねもころに言とひかはし。まましくもみねはゆかしみ。春されは花をたつぬと。秋されは月を思ふと。野に山に折節とに。たつさはり

遊ひし吾兄か。神無月まくれをいたみ。もみち葉もいろつきぬれり。吾門の小門に音して。けふもかもとひや來なまし。明日もかも來や問らむと。あさにけにまちつゝあるに。あよつれか人のいひつる。たはまとか人のつけつる。たかたかに吾まつひとは。久かたの天雲かくり。入日なすかくりゆきぬと。玉ほこの道に聞つゝ。うつゝともいめともわかす。朝さりの思ひまといて。夕露のけなはけぬへく。こいまろひひつちなけとも。老るしなくせむすへしらに。もみちを一枝手をりて。なき人の是を形見とまぬひつるかも。

反歌 もみち葉はかくにほへともとに見し人しなればあやにさふしも

登臨大矢田神山作歌並反歌

遠つ神吾大きみの。まろしをす天下には。高山はまゝにあれとも。まけ山は澤にあれとも。千早振神代のときに。天若日子神の命の。みあらかを高まらしけむ。百まぬの美濃國なる。大矢田のそのみつ山。神からかくしたふとき。山からかくしともしき。取よろふ神の端やま。いつはしも時はあれとも。秋の葉のもみつる時に岩かねの。まもとふみわけ。木根とりいさつきのほり。いたゝきにわか立みれば。背友山は牧の山並。たゝなつく青垣こもり。みなきらふ川遠まろし。かけともは國のまほらま。百千足やにはまみゝに。朝さらすけふり立こめ千町田のいな葉の浪に。夕さらす雁は啼なり。山みれば山しみかほし。里みればさとも住よし。もち鳥のうへかゝれこそ。神代よりかみも住たひ。うつせみの今のをつゝも。みるひとの語りつく

らし。あはれくあやにうるくは志山ぞ。大矢田の山

反歌 おほやたの神のみつ山朝にけに常にみれとももしき此山

案山子の書を讀せよと人に乞はれて

あし引の山田のくろに。篋笠を身にとりよそひ。弓矢をは手にとり持て。田なつものあらすけたもの。むら鳥を來入なこそと。雨風のあらさあしたも。露霜の寒きゆふへも。おこたらすぬれそほちつ。いたたせるそほと神は。かたちこそあやく見ゆれ。くすしくもいませす神かも。此神は神代の時ゆ。足はまもあるかすあれと。天の下のもろくのど。ことくにまれる神とよ。いちまろき御名をおひもち。うつそみの世をさきはひて。荒御魂大みたからか。とり作るなりを守らひ。和魂學ひの道に。思ひかね深くあらせて。いやすめすめたまへは。いにしへも今のをついも。とこしえに朽るとなき。みのかさの是のみかたを。くえひこの神とあふきて。あさよひにこひのむまるし。空しからめや。

明治六年十一月十七日長谷部惣連病死悲働作歌並反歌

かけまくも綾にかしこき。食國の大政いにしへにかへらふ御代の。あたら代に任へまつりて。すめろきの遠のみかど。百まぬのみの國に。はるくにくたり來まして。あたらたまの年の緒永く。此民をなていつくしみ。墨繩をはへたるかこと。はたちまりひとつの郡。くまもをらすみし明らか。平らけく治めし君は。はぶ葛のいやとほなかに。つみなくもなくいませと。く

ぬちの人のまどく。さもむかふ心をよせて。大船の思ひたのむを。朝霜やさむくをくらむ。夕風やはけしかるらむ。いなは山めての盛の。もみち葉もうつろひにけり。世の中はかくのみならず。千とせもとをもひし君か。朝よひにいて入まし。門みればかともひらかす。白妙の衣とりきて。家ひとの聲たにたてす。春鳥のさまよふ見れば。いはむすへせむすへしらに。ますらをのところもなく。あひまろひくい八千度なきつるかも。

反歌 もみちはのちりのまかひにかきろひのかけたに見へすなりし君はも

述心緒長歌一首

いなしこめまこめき國と。いさなきの神の詔ま。根のくにの底の國より。此國にあらひつとひ來る。禍つ日の神の心か。ゆしきやすめらみくに。わたの外日の入る國ゆ。まかこのはひこり來るを。うつそみの世人ことごと。みよしぬのよしとへなひ。其まにあひましまり。まか言に相口あへて。村きもの心酔しれ。目もみえすうつなきさま。朝に夕に見れば愛れたし。そまもへはいきとほろしも。遠つ神わか大君の。はつ國をまろしめす世は。満潮のいやますく。望月のたはしけむと。大船の思ひたのみて。人皆のまちしかひなく。かくのみしくたら行世を。玉ちはふ神はまますや。何しかもちまひ玉はぬ。御代みよの御靈まますや。何しかも守り玉はぬ。あわれくかなしき時か。かけまくはかしかれ共。あめつちの神相うつなひ。やちまたひま八衢姫も。獨立船戸の神も。ことくにつとひたまひて。空かそふ大やちま

たに。岩坂なすさやりいまして。今よりは水穂の國をうへゆかは。上を守り下ゆかは下へをま  
もり。夜の守りひるのまもり。平らけくまもりさきはへ。禍事をはらひきよめて。やす國と  
しつめ玉へと。天つ水あふきこひのみ。あふけなく御代をそいはふ常盤かきはに。

反歌 やちまたにいはいへすゑて諸のまりを來莫戸の神をまつらむ

明治廿九年二月種痘術發明の百年の辰にあたりて其開祖英國人善那氏の功績を讚美して

作る長歌

あかもかさあるはいもかさ。もかさてふその瘡はしも。あをによし奈良の大宮に。をす國をま  
ろしめしける。天皇の御代のなかはに。たくふすまさらさの國ゆ。筑紫人うつり傳へて。ゆゆ  
しさや此あしきけの。秋つしまやまつくぬちに。つる草のはひこりにけり。まかしよりちとせ  
と云ひて、百年にあまるとし月。はふ蕨のたゆることなく。世の中にありとある人。こも枕た  
かきみじかき。玉きはる命のうちに。一たひはやまぬものなく。いゆまゝののかれしえねは。  
せんすへのたつきをまらす。そこゆえに神のやまひと。このかさををちつかしこみ。やみ人の  
ある家ことに。まめはへていつきまつり。老わかき來よりつといて。やすからすもてさわけ  
は。くすしらはあしを空にて。遠近にはしりまとへり。然れともいかにかもせむ。この瘡のは  
やる年には。天の下ひなも都も。ちしなへて家より家に。花染の移り行きつつ。春草のわかき  
子供ら。冬艸のまをるゝかこと。やみあやしいのちしぬるも。空かそふ多くしあれば。こそす

くふ道はあらしか。こをいやすすへはなきかと。うつそみの世々のくすしか。むらさきもの心つ  
くして。求めしもとめ得すして。年久に過來にけるを。大御代の榮えとともに。物ことの開  
くる時と。あやしきはもかさのたねを。人ならぬ牛よりとりて。うなぬ子のうてのあたりに。  
眞針もて植てをふして。いたみなくあつしくもなく。いもかさのやみのわすらひ。いと易くの  
かれうるみち。ひらけつゝここにはしめて。わか國の千年餘りの。わさはひの根はたへにけり。  
あやにくくすしきかも。此道のかくひらけつる。みなもとをいかにといふに。わたの外いさ  
りす國に。せんなあとといひける人の。さかしかる智りのはしに。かううしのもかさの種を。人  
の身にとりうるわさ。さとり得て世にひろめしを。いそとせの後にいたりて。長崎にわらん  
の船の。そのたねを持たり來て。傳へしそもとなりけると。語りつきいひつききつる。せん  
なあかいさを思へは。あし引の山より高く。わたつみの海より深し。今年はも道のひらけし。  
始めよりひともとせに。なりぬてふむかしまぬひて。かしこみもみたまのふゆを。のちの世  
に忘れぬためと。さかしらにことあけはしつ。今より千年の後も。このみちのいやすすゝに。  
世に引く傳はりゆかは。そをうくる人のことく。いもかさのうさ目よぐるは。せんなあのだ  
まものなりと。その人をあほかさならめや。まのはさらめや。

今様數首

曉歸雁

かすみこめたる須磨の浦關の戸さしの明かたに名のりをまつゝ行雁のこゑよりまらむはるの窓

川口氏の遠祖を祭るに

にほふ櫻の花かけにぬさとりむけてまつりつる心のまことかくはしくいく世のはるかかをらむ

海邊霞

浪まつかなる水の江の浦ままとほく霞ひ日に釣する船はたか子ともまらてゆかしき波の上

和歌の浦波うらくとかすみわたれる朝ほらけかすみかくれにたつそ鳴汐みちくらしだつそなく

あしかちるてふなにはかたはるのあけほの面白の浦のけしきやそことなくかすみかくれにたつなきて

隔水看花

よし野の川の朝ほらけへたつる水はくらけれと木末まらみてかのさしの花こそとほく見えわたれ

待花

やよひの空のうらくとかすみあしたにさくらはな今やさきぬと山里のたよりのみこそまたれけれ

山家春

のきはの柳もえて軒はのうめも匂ふなり此まほの戸に鶯のはつ音はいつかきこゆへき

谷の戸いつる鶯のなくはつこゑを人とはぬわか山すみの思ひいてに獨さくこそたのしけれ

月前掃衣

秋風さむみ賤の女かむまらふしまら月かけのほそくなるまでから衣うたぬよ半こそなかりけれ

夕蟲

千くさ花さく秋の野も見えずなりゆく夕まくれそことわかねと機ぢりのこゑのあやこそさやかなれ